

財団大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第4集

茨木市大字粟生岩阪・箕面市大字粟生間谷所在

粟 生 岩 阪 遺 跡

国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 6

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

あ お いわ さか
粟 生 岩 阪 遺 跡

国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

－ 江戸時代炭焼窯の調査 －

1996・4

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



調査地遠望（南上空から）



2-OK全景（東から）



A区谷2土層（北西から）

序 文

箕面市・茨木市の地は、大阪府の北西に位置し、自然と文化遺産に恵まれた所です。中でも勝尾寺（かつおうじ）・總持寺（そうじじ）の二大名刹が早くから文化財の指定を受けるなど、今に伝えられる建造物・美術品・古文書などが顕彰されてきました。

緑多い丘陵地や田園地帯に良好に残されてきた埋蔵文化財は、高度経済成長期以後、京阪神経済圏のベッドタウン化による大規模開発に伴い、日々、その姿を現しつつあります。

大阪府北部は、急激に都市化した住宅地と住宅都市、往古からの山間・田園地帯が混在し生活空間を形成しております。21世紀に向けて、国際的な学術研究施設や文化施設、自然環境をとりこんだ住宅域等、都市型生活基盤の整備が急務とされることは自明の事実で、大都市大阪ならではの現実といえましょう。

このたび調査を実施致しました粟生岩阪遺跡は、大阪府と住宅・都市整備公団が施行する21世紀に向けた総合特能都市と称する国際文化公園都市予定地内の分布調査で発見された遺跡です。

今回の発掘調査は、事業2箇年目に当たる調査でありました。予想されていた中世期の集落跡の発見には至りませんでした。近世の人々の生産の痕跡を再発見でき、山間土地利用のあり方を一定程度明かにできた事は、成果として挙げる事ができます。

今後、この事業に伴いまして、さらに多くの歴史的事実が明らかにされて行くことが期待されます。地道な資料集積の積み重ねが、文化財の保護・保存対策に必要な不可欠なものと考え次第です。

最後に、本事業を進めるにあたって御支援・御協力を賜った大阪府教育委員会・住宅都市整備公団関西支社・茨木市教育委員会・箕面市教育委員会・地元関係各位に、深く感謝致しますと共に、今後とも当センターの事業に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年4月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は大阪府箕面市大字粟生間谷、茨木市大字粟生岩阪・大字宿久庄地内に計画された、国際文化公園都市特定土地地区画整理事業に伴う粟生岩阪（あおいわかさ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、住宅・都市整備公団の委託を受け、大阪府教育委員会の行政指導のもとに、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は、大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所が実施することとなり、調査部長井藤徹・参事兼調整課長中西靖人・事務所長玉井功・北部調査係長小野久隆の指示のもと、技師田中一廣が実務を担当した。
4. 現地調査は1995年6月7日に開始し、1996年1月15日に復旧工事も含めて終了した。整理作業並びに本書の作成は、担当者が1996年2～3月に行い、業務を完了した。
5. 調査の実施にあたっては、住宅・都市整備公団関西支社大阪国際文化公園都市開発事務所、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、茨木市教育委員会、(株)久本組、阪急航空(株)、(株)島田組、地元自治会など関係各位の協力を得た。
6. 調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、宮脇薫・濱野俊一（茨木市教育委員会）、橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、上林史郎・西川寿勝（大阪府教育委員会）、中西靖人・福岡澄男・赤木克視・福原健治・福田英人・金光正裕・久家隆芳・中川義朗・合田幸美・伊藤武・岡本圭司（研究センター職員）、若炊善満（大阪外国語大学学生）・中南尚夫の各氏から御指導・御教示・御協力を得ました。記して感謝の意を表します。
7. 調査方法は、試掘調査と同じく、旧大阪府埋蔵文化財協会の作成した「発掘調査規定」に従って地区割りを設定し、方位は国土座標第Ⅵ座標の座標北を基準とし、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。図中の国土座標値の単位はkaである。土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1995年（15版）に準拠して命名した。本書構構記号はOS：溝（Stream）、OO：土坑（Orifice）、OP：ピット（Pit）、OK：窯（Kiln）、OZ：水田、OL：池（Lake）である。
8. 本調査における阪急航空(株)前北順二撮影士にかかる空中密着写真以外の写真は総て担当者が撮影した。本書の白黒写真焼付は、南部調査事務所東北分室平井貞子写真主査による。
9. 出土した遺物・作成した図面・写真などの記録については、（財）大阪府文化財調査研究センターで保管している。広く利用されることを希望する。
10. 本書の整図、図面・図版作成、執筆・編集は田中一廣が行った。尚、Ⅲ章3・4節については担当者（技師上林史郎・岡本圭司）から提出されている結果報告を編集して抄録とした。

目 次

序文	理事長 坪井清足
巻頭カラー図版	
例言	
第Ⅰ章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と既往の調査	1
第2節 調査の方法と経過	2
第Ⅱ章 周辺の環境<箕面市・茨木市関係埋蔵文化財文献抄>	4
第Ⅲ章 調査の結果	12
第1節 層序と概要	12
第2節 検出遺構	13
第3節 試掘調査の成果	17
第4節 粟生間谷地区調査成果概要	21
第Ⅳ章 結章	25

挿図・表目次

Fig. 1 箕面市・茨木市位置図	1
Fig. 2 大阪府地域計画図を利用した地区割り	3
Fig. 3 粟生遺跡群周辺遺跡分布図 (1:50000)	6
Fig. 4 2-OK平面・断面図 (1:40)	14
Fig. 5 試掘地区土層柱状図 (1:40)	18
Fig. 6 国文・粟生遺跡群1994年度調査写真	23
Fig. 7 現況水田地割りと窠・水利との関係図	26
Tab. 1 周辺遺跡群地名表	7

図面・図版目次

PLAN. 1 調査地位位置図
PLAN. 2 全体土層断面図 (縦1:40、横1:400)
PLAN. 3 粟生岩版遺構全体図 (1:300)
PL. 1 調査地周辺空中写真 (1948年撮影)
PL. 2 調査地遠望・調査前現状
PL. 3 調査区全景垂直写真 (1995年撮影)
PL. 4 A区全景・B区全景・A区谷2付近と1-OK遠望
PL. 5 谷1とA区全景・谷3とB区北半全景・B区南半全景と2-OK
PL. 6 2-OK完掘全景・焼壁部・煙道部・検出状況・埋土状況
PL. 7 1-OK全景・3-OK検出状況・4-OK掘削状況・3-OK完掘状況
PL. 8 6-OS土層・谷3落ち込み土層・B区土層・谷4土層

第I章 序 章

第1節 調査に至る経緯と既往の調査^(註)

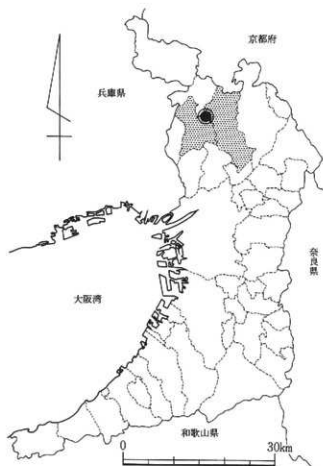


Fig. 1 箕面市・茨木市位置図

近畿圏基本整備計画においては「北大阪での研究開発機能・国際交流機能など特色ある機能を核として新しい開発拠点」と位置づけられている。1989（平成1）年には、茨木・箕面両市が建設省より「インテリジェント・シティ」の指定を受け、1992（平成4）年5月に国際文化公園都市地区が市街化区域に編入、土地区画整理促進区域・土地区画整理事業・用途地域・都市計画道路・都市計画公園の都市計画決定がなされるに至った。

粟生岩版遺跡群はそうした中で、住宅・都市整備公団が国際文化公園都市・特定土地区画整理事業を施行するにあたり、1993（平成5）年度に財団法人大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会により実施された文化財分布調査で、大阪府箕面市粟生間谷・茨木市粟生岩版地内の山中に、散布地としてマークされていたが、その実態については全く不明であった。当該地の遺構・遺物の有無を確認する目的で、1994（平成6）年10月より翌年1月にかけて、試掘調査が実施された。一部地点で遺構・遺物が確認され、これら部分を含んだ地域について発掘調査が必要であるという判断が大阪府教育委員会事務局文化財保護課より行政指導され、今回の調査に至った。

粟生岩版遺跡（あおいわさかいせき）は、箕面市（みのおし）と茨木市（いばらぎし）の複雑な入り会い地を含んだ山間丘陵部に位置する。

大阪府は、北摂山間丘陵部742.2haに国際的な学術研究施設や文化交流施設、さらに生命科学分野の研究機関を組み込んだ総合特能都市「国際文化公園都市」を計画した。事業は、大阪府総合計画において、「国際文化ゾーン」として国際交流と学術文化活動拠点の形成を目指すもので、1986（昭和61）年11月「国際文化公園都市基本構想（案）」公表と同時に「国際文化公園都市建設協議会」が設置されている。翌年には、新しい近畿の創生計画（すばるプラン）における「近畿リサーチコンプレックス構想」の重要なプロジェクトとして、第四次全国総合開発計画において「北大阪等における産業・研究開発の総合プロジェクトを推進し国際的な文化・学術研究の拠点を形成する」と、1988（昭和63）年2月の

第2節 調査の方法と経過

財団法人大阪府文化財調査研究センターでは、1995（平成7）年度より大阪府埋蔵文化財協会の事業を引き継ぎ、大阪府教育委員会の指示に基づいて、住宅・都市整備公団関西支社の依頼を受けた、上掲事業に伴う発掘調査を実施することになった。1995（平成7）年度は、94年度に試掘が行われた地点（S108）の粟生岩阪遺跡の全面調査（最終調査面積約9,970m²・掘削土量：機械約6,487・人力約4,938m³）と11箇所の試掘調査（トレンチ232本・調査面積1943m²・掘削土量約897m³、担当北部係長小野久隆）が対象であった。

全面調査の粟生岩阪遺跡地点の試掘調査時の調査区は、北からA～Fの5つの地区を対象としている。今回の本調査は、谷を挟んで、調査区をA区地区（大字粟生岩阪165～175番）・B区地区（141～146番に概ね相当）と仮称し、平成7（1995）年6月7日～8（1996）年1月15日にかけて二分して発掘調査を行った。中・近世遺物が包含され、土坑・落込み・ピットが確認されるという、集落を検出調査することが目的であったが、残念ながら検出主要遺構としては、近世炭焼窯跡5基、近世～近現代水田跡を確認するにとどまった。

調査は、1995（平成7）年4月27日に粟生岩阪遺跡工区として土工申請業者と航空測量委託業者が1996（平成8）1月31日工期で発注された。準備工の後、6月14日から現地の日斜面を切り崩して約390mの工事用進入路の建設を開始し、伐採作業・水路の横断管敷設工を実施に移し、それらが完了した7月25日から発掘調査を開始、A区からB区へと進めた。A S350型ヘリコプターからのRC-10（15/23）による空中写真測量図化（1/400撮影・1/50図化）は、それぞれの地区毎に9月27日と11月21日に実施した。12月27日に調査を無事終了し、埋め戻し・後かたづけを平成8（1996）年1月15日まで行った。整理作業・図化編集と報告書作成を2月1日より3月31日まで延べ30日間で行った。

具体的な調査方法は省略するが、調査の地区割りについて少し述べておく。旧埋蔵文化財協会では、「調査規定」および既刊の報告書に触れているように、遺跡の位置・調査区内の地区割りを示すのに、1968（昭和43）年建設省告示3059号規定の国土第Ⅵ座標系を基軸に使用し、大阪府発行（1984（昭和59）年建設省国土地理院承認）1:2500地域計画図の図画割を基にした最小4×4mの区画までを示す方法を考案している。これによって、大阪府下全域を最低4m四方のグリッドで網羅できるという、全国的にも画期的なもので、現時点ではそれを上回るマニュアルが示されていないと判断するので、総て、1985（昭和60）年に最低限の調査精度を確保する目的で作成した『発掘調査規定』に準拠することにする。

ちなみに、今回の調査対象地は、地域計画図（地形図）の大K-5-15に該当する。大K-5-15の500×500mの12の方眼区画（A～L）で割ったEにあたり、Eを100×100mの25区画（01～25）で割った12～14、17～19、22～24に該当している。それを1辺25等分した縦列・横列A～Yの625区画の4×4mグリッドができあがる。つまり大K-5-15E12A B等と表される地点呼称で遺物・遺構は取り上げられる。

調査区は、A・B区と仮称したことは述べたが、各土層観察用畦に沿って幅4mを基準として深掘を行い、複雑な地形で検出された谷部分についてはトレンチ掘りで、また遺構・遺物の有無と肩面・底面を把握する為に適時トレンチ掘削をし、完掘は控えた。

尚、調査区北端と南端交点での座標は、 $X = -126,714.734\text{km}$ ・ $Y = 43,784.418\text{km}$ 、緯度・経度では、 $B = 34^{\circ}51'24.1825''$ ・ $L = 135^{\circ}31'15.9652''$ と $X = -126,889.884\text{km}$ ・ $Y = 43,758.913\text{km}$ 、 $B = 34^{\circ}51'$

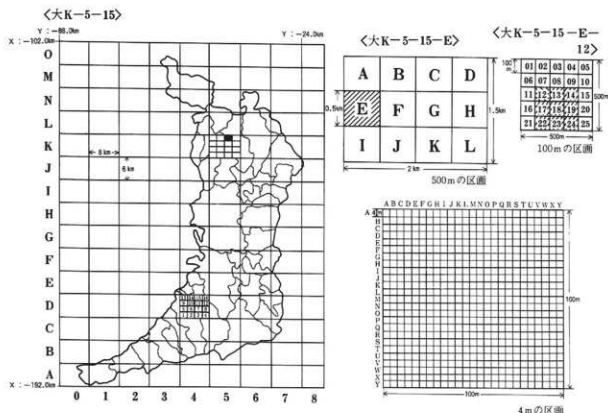


Fig. 2 大阪府地域計画図を利用した地区割り

18.5018°・L=135°31'17.0024"である。又、座標北から磁北へ西偏6°40'、真北には東偏N=0°16'25.3"~0°16'24.7"を測った。

(註) 事業における既往の調査は、1993(平成5)年度に広大な開発地全域を対象として、都合2度(5~6月・3月)にわたって当研究センターの前進である財団法人大阪府埋蔵文化財協会〈担当技師三木弘・西川寿勝[93-07国文1]、技師田中龍男・横田明[93-21国文2]〉が文化財分布調査を実施し、3度目にあたる補足調査を大阪府教育委員会文化財保護課〈担当係長玉井功〉が実施している。1994(平成6)年度事業として、S106・108・120地点周辺の試掘調査[94-13試]〔調査時は、粟生間谷遺跡平成6年度試掘調査〈北部〉と呼称〈担当技師岡本圭司〉と、粟生間谷遺跡と命名された間谷地点の全面調査[94-13]〈担当班長上林史郎〉とが実施されている。同時に、徳大寺地区で府道の拡幅に伴って試掘と簡単な発掘調査が「粟生間谷IV区」の名称で行われている。また、歴史的・文化的環境が変貌するのに対応して歴史学各分野の学識経験者(民俗・社会、歴史、地学・地理、建造物、石造物、美術工芸品の各環境等の調査)で組織する「国文都市事業に伴う地域の歴史・文化総合調査」の委員会が準備期間を経て、1995(平成7)年9月25日以降実施に向けて動き出している。

尚、『粟生(おお)』は、広域名称としてかなり広い範囲に両市にまたがって存在しており、混同のないようにそれぞれ字名で地点・遺跡を区別すること、一貫した地区名称で呼称して行かなければならない。とりあえずは、国文北地域を『粟生遺跡群』として認識する。

第II章 周辺の環境

茨木市の北西・箕面市東方に位置する粟生・宿久庄地域は、千里丘陵の北端と北摂山脈南麓の老ノ坂山地とに挟まれ、谷・尾根が入り組んだ谷底平野部である。老ノ坂山地丘陵裾部や段丘に大半の旧自然村落が立地している。近年、丘陵部・段丘部が開発され、大型の公営団地や民間住宅地が出現している。

谷山川・茨木川と共に安威川の支流の一つである勝尾寺川が北から南へ大きく蛇行して東へ流れ下っており、山脈から水を集めた裏川や天王川の注ぎ込んだ川合裏川が、粟生間谷付近で合流する。

また、現在は国道171号線にとって変られているが、かつての山陽道である「西国街道」が東西に通る。郡山宿本陣である「椿の本陣」も現存する。律令期以後、この地域は摂津国嶋下郡宿久郷と貴嶋郡の地にあたる。箕面市側は調査例が極めて少なく、遺物散布地であるのが現状である。考古学的知見から少し地域を広げて遺跡を概観し、箕面市・茨木市関係の埋蔵文化財文献抄を掲載し、歴史的環境を補っておく。発掘・発見史や地域の研究史が迎えるようにし、今後の調査の量としたい。

先土器時代は、箕面市側では地歴クラブなどにより積極的に調査されているので、採集物ながらも比較的資料が知られている。洪積段丘層における新稲遺跡や宮ノ原遺跡の国府型ナイフ形石器・瀬川遺跡の石核等がある。その他、稲・桜池芝・白鳥・奥・稲田・大池などでも石器が採取され、稲地域は注目されると説かれている。茨木市側では、山麓部の初田遺跡や丘陵裾部の太田・耳原・郡・東奈良遺跡などでナイフ形石器・有舌尖頭器が単独または数点、表面採集や後世の覆土から発見されている。粟生間谷遺跡の調査においても有舌尖頭器が発見されている。高槻市の郡家今城遺跡から礫群や石器群が検出され、良好な資料を提供している。他に塚原・津之江・郡家川西遺跡などからも出土が報告されている。

縄紋時代遺跡では、耳原遺跡が知られている。後期から晩期にかけての、特に、晩期では滋賀里Ⅲ式から長原式期までの壘棺墓16基などが検出されている。東奈良遺跡においては、前期末の大蔵山式やC字爪形文土器や晩期後半の大洞A式の浮線文土器・石棒などが出土している。安威川右岸の牟礼遺跡では、自然流路および井堰・水田が検出され、流路からの遺物に晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋・長原式）の縄紋土器がある。粟生間谷遺跡でも粗製の深鉢が、近年、総持寺門前でも滋賀里Ⅲ式・船橋式の壘棺墓が検出されている。山麓部側では、初田・西福井・太田遺跡で縄紋土器が採取されている。郡遺跡で石刀、粟生間谷では石匙が出土しており、今後、良好な遺構が検出される可能性がある。

弥生時代前期では、東奈良・目垣遺跡が知られている。前期の末には、耳原・郡遺跡でも集落が形成される様だ。東奈良遺跡は、高槻市の安満遺跡などと共に、北摂地域における拠点集落である。銅鐃鋳造などの出土から中期後半には青銅器生産が判明している。主要河川の対岸や丘陵部・山間部では、見付山・春日・太田遺跡や高地性の集落であろう石堂ヶ丘遺跡など中期から後期の遺跡数の増加が確認されており、新たに集落が形成されたと考えられる。東奈良や郡遺跡の拠点集落では集落規模が大きく、分村として成立したものと思われる遺跡が出現している。中条小学校遺跡や中河原・倍賀遺跡などがそれにあろう。箕面如意谷町では、工事中に袈裟浮文銅鐃（総高84.8cm）が発見されている。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から連面と存続する郡・倍賀・宿久庄・中条小学校・東奈良遺跡などが知られている。東奈良遺跡では、前期初頭に幅10～7mの大溝が掘られており、多くの搬入土器が出土する。古墳時代集落遺跡の実態は、墓である古墳の存在に比べ不明な部分が多いが、上中条・溝津遺跡が近年調査され、堅穴住居・掘立柱建物や水田の検出を見ている。また、中～後期にかけての

3棟の埴輪工房跡・18基の埴輪窯が発見・調査された新池遺跡からは、埴輪の生産・供給の実態と共に、大規模な掘立柱建物集落の存在が明らかになってきた。

墓であり、モニュメントである古墳は、山麓部と千里丘陵の裾部に多くが築造され、高槻地域も含めると北摂津域、中でも老ノ坂山地南麓に集中していると言える。これは、淀川水系の肥沃な土地と交通の利の地を反映してのことと理解できる。前期には、全長約100mを越える前方後円(方)墳である紫金山古墳と將軍山古墳が相次いで築造されている。後円部中央には、竪穴式石室があり、粘土棺床には長大な割竹形木棺が納められていた。紫金山からは、12面の鏡蓋のほか、貝製鉄形石・車輪石・筒形銅器・短甲・鉄製品など豊富な副葬品が出土している。また、前期の末には、径10m程の円墳である安威0号墳や全長45m程の前方後円墳で割竹形木棺を入れた粘土椀2基が検出された1号墳が出現している。中期では、全長226m・後円部径138mの環濠式前方後円墳で、宮内庁管理下にある太田茶臼山古墳や太田石山古墳が5世紀中頃築造される。後期では、『日本書紀』に記載された継体大王の墳墓(三島藍野陵)ではないかと目される、6世紀前半築造の、全長190m・二重の環濠式前方後円墳 今城塚古墳(外濠を含めると全長340m)の存在は、この地域の古代史を彩っている。中小古墳では、横穴式石室をいち早く導入した青松塚古墳を始め、南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳の独立墳が築造され、茨木の小地域を捉えると一つの系譜が迎れる。そして、山麓部を中心に散在・密集型の特徴を備えた、新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ瀬古墳群・塚原古墳群・塚脇古墳群など、横穴式石室を内部主体とした群集墳が展開している。また、カマド塚である上寺山古墳、終末期の初田古墳・阿武山古墳が単独墳として築造されている。近年では、駅前・郡遺跡や段丘上の総持寺遺跡などで、墳丘を削平された埋没墳が多数見つかっており、後期群集墳に先行する、木棺直葬方形墳墓群と考えられ、注目される。

奈良時代の律令期にはいと、淀川の右岸の北摂地域には嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡が設置されている。嶋上郡地域(島本町・高槻市)郡衙は郡家町の嶋上郡衙遺跡がよく知られている。一方、嶋下郡地域(茨木市・摂津市・吹田市)の郡衙は不明であるものの、旧山陽道(西国街道)沿いの郡遺跡周辺にあったと推定されている。郡遺跡では、近年、奈良～平安時代にかけての掘立柱式の建物跡などが検出されだしている。今後、周辺で郡衙が発見される可能性が高い。また、昨年から今年度にかけての総持寺遺跡の調査では、奈良後期から平安期の3時期の官衙的配置をとる建物群が検出され、集落構成や内容が明らかになりつつある。粟生間谷遺跡でも同時期の集落が検出され、三彩小壺による地鎮めの遺構が注目された。この地の有力氏族寺院としては、飛鳥から奈良時代にかけて創建された太田廃寺・穂積廃寺が存在する。太田廃寺からは、塔婆心礎及び舍利容器や複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦等の出土が知られている。他には、安威の大織冠山から凝灰岩製石櫃と三彩釉有蓋壺の蔵骨器が発見されている。

平安期に入ると、勝尾寺と総持寺・忍頂寺が建立されている。この期には、摂関家の藤原氏の荘園が多く存在する。荘園支配は、中期になると領主の氏神・氏寺であった春日大社や興福寺等に移り、室町時代半ばまで続いていることが文献から知られているが、考古学的知見からの成果はまだあまりない。

近接地における中世の遺構・遺物は、西福井遺跡で検出されている。近年、茨木川左岸に立地する玉柳遺跡において、平安時代後期から室町時代前半にかけての集落が水田を伴って検出されている。井戸や大型掘立柱建物に伴って溝で囲まれた、いわゆる「環濠居館」も確認され、和鏡・刀や漆器・木器・滑石製品など豊富な遺物の出土を見ている。また、新庄遺跡においても9～12世紀の河川や掘立柱建物、小型滑石製地鎮具が検出されている。特徴的な遺物として、緑釉陶器・越州窯系青磁の出土がある。宿

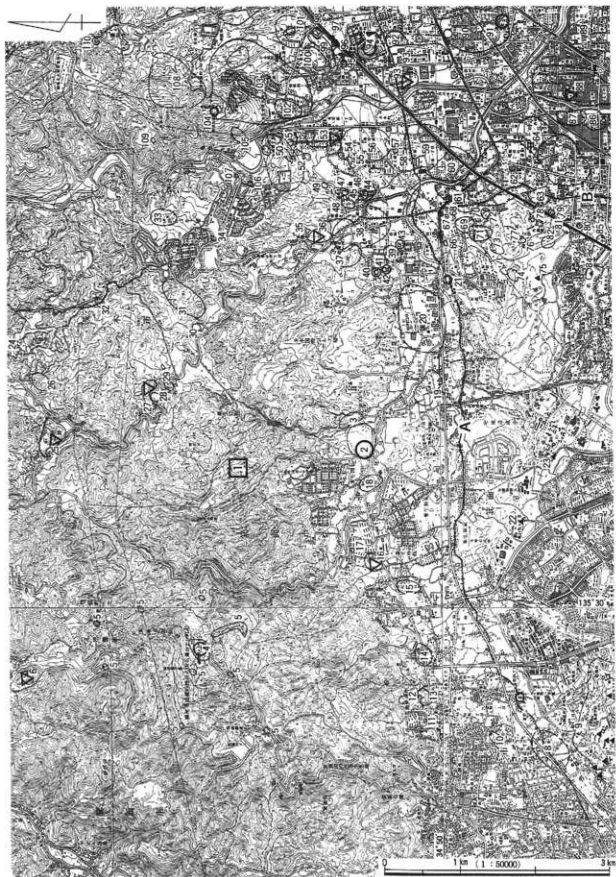


Fig. 3 粟生遺跡群周辺遺跡分布図
 (A: 近世西国街道 B: 近世亀岡街道 ○: 著名遺跡 ▽: 城郭遺跡)

Tab. 1 周辺遺跡群地名表

NO	群数→F	遺跡名	種類	時代	所在地	備考
1	—	栗生岩飯遺跡	生産跡	江戸	茨木市大字栗生岩飯地	今回調査地点
2	—	徳大寺遺跡	生産跡・寺院跡	平安・江戸	茨木市宿久庄	新規発見遺跡
3	—	栗生間谷遺跡	集落跡	平安前期	茨木市栗生間谷東	新規発見遺跡・古代掘立建物群
4	3-1	勝尾寺	寺院跡	平安～現代	※ 栗生他	重文・紙本墨書法華経 府有文
5	3-29	勝示八天石蔵、石造五輪塔及町石	建造物・石造物	鎌倉	※ 大字栗生間谷	国史・寛喜2(1230)年銘 寶治1(1247)年銘2基
6	2-50	高山向山城跡	城跡	室町	豊能郡豊能町	陶磁器
7	3-6	豊野三平田邸	宅地	江戸	茨木市豊野3-314-3	府史
8	3-19	稲遺跡	散布地	先土器	茨木市	旧石器採集地
9	9-25	桜井谷竈跡群	竈跡	古墳後	茨木市瀬川・豊中市	須恵器窯・須恵器
10	3-27	唐土遺跡	散布地		茨木市	
11	3-4	如意谷遺跡	銅鑄出土地	弥生	※ 如意谷	従後押文銅鑄
12	3-12	如意谷中世石組遺構	祭祀跡	中世	※ 如意谷	1.5mの方形石組基壇2基
13	3-11	坊島遺跡	集落跡	中世	※ 如意谷	井戸・礎物
14	3-18	白鳥遺跡	散布地	先土器	※	旧石器採集地
15	3-26	外院遺跡	散布地		※	
16	3-30	善福寺家城跡	城跡	室町	※	陶磁器
17	3-25	栗生奥有舌尖頭器出土地	散布地	先土器	※	有舌尖頭器
18	3-17	栗生間谷大日遺跡	散布地		※	土器器
19	4-81	宿久庄西遺跡	集落跡		茨木市	
20	4-59	宿久庄遺跡	集落跡	弥生～鎌倉	※ 宿久庄1～3丁目	古代建物・中世建物・須恵器
21	4-33	郡山宮本陣	陣屋	江戸	※ 宿川原町3-10	国史・通称「樽の本陣」
22	10-61	須恵器窯跡No.35・36	窯跡	古墳	吹田市上山手町2丁目	消滅・2基並列
23	10-38	吉志部瓦窯跡	瓦窯	平安	※ 岸辺北4丁目	国史・平窯9基・登窯4基他、平安
24	4-85	千歳寺キリシタン遺跡	書跡・絵画等	江戸	茨木市千歳寺	宮供給瓦 彫刻・書跡・絵画(個人蔵)
25	4-64	泉原城跡	城跡	室町	※ ※ 265	重美・マリア十五玄義図・墓碑
26	4-96	泉原遺跡	集落跡		※ 泉原	陶磁器
27	4-68	佐保城跡	城跡	室町	※ 佐保、庄ノ本	陶磁器
28	4-3	庄ノ本遺跡	散布地	弥生	※ 佐保庄本	須恵器・土器器・瓦器・石礎
29	4-68	佐保城跡	城跡	室町	※ 佐保、庄ノ本	陶磁器
30	4-89	ぼろ塚	古墳	古墳	※ 南清水町	
31	4-100	佐保栗山勢跡	營跡	室町	※ 佐保	陶磁器
32	4-2	園見遺跡	散布地	弥生	※ 大岩	磨製石斧
33	4-4	大門寺古墳群	円墳	古墳後	※ 大門寺	2基以上・横穴式石室
34	4-88	初田古墳石室	考古資料	古墳終末	※ 福井	石室修築地
35	4-11	飯ヶ谷古墳	円墳	古墳後	※ 福井3丁目	横穴式石室
36	4-69	福井城跡	城跡	室町	※ 東福井3丁目	陶磁器
37	4-20	新屋古墳群	古墳	古墳後	※ 西福井4丁目	約30基・横穴式石室
38	4-71	西福井遺跡	散布地	弥生～古墳	※ 西福井	中世遺構・遺物、土器器・須恵器
39	4-23	海北塚北方遺跡	集落跡	古墳	※ 西福井1丁目	須恵器
40	4-21	紫金山古墳	古墳前	古墳前	※ 紫金山1丁目	全長100m・縦穴式石室・鏡座類
41	4-61	青松塚古墳	円墳	古墳後	茨木市室山1丁目	初期横穴式石室・鏡・馬具・埴輪
42	4-22	南塚古墳	前方後円墳	古墳後	※	全長50m・石棺・馬具・帯金具
43	4-24	海北塚古墳	円墳	古墳後	※ 西福井1丁目	府史・横穴式石室・馬具・土器類
44	4-15	村軍山古墳	前方後円墳	古墳前	※ 西安威1丁目	全長110m・縦穴式石室・鉄槌

NO	郡誌p-F	遺跡名	種類	時代	所在地	備考
45	4-14	将軍塚古墳	円墳	古墳後	〃 西安威2丁目	横穴式石室、伝藤原鎌足墳墓
46	4-16	将軍山古墳群	古墳	古墳後	〃 〃 1丁目	4基の後期古墳、横穴式石室
47	4-13	将軍山第1地点遺跡	墓地	弥生後	〃 〃 2丁目	壺棺・甕・鉢
48	4-17	真龍寺古墳群	円墳群	古墳後	〃 〃 1・2丁目	横穴式石室
49	4-12	将軍山第2地点遺跡	土壌墓	弥生後	〃 〃 2丁目	土壇・V様式蓋、高杯
50	4-8	安威古墳群	円墳	古墳前・後	〃 安威	粘土器・鏡・鉄製品、横穴式石室群17基以上
51	4-99	安威磐跡	磐跡	室町	〃 〃 3丁目	陶磁器
52	4-10	安威寺跡	寺院跡	鎌倉	〃 〃 3丁目	瓦葺順
53	4-85	安威城跡	城跡	室町	〃 〃 2丁目	土師器、陶磁器
54	4-18	大日寺跡	寺院跡	平安	〃 〃 2丁目	須恵器、瓦
55	4-19	安威西垣内遺跡	集落跡	弥生	〃 〃 2丁目	弥生瓦
56	4-74	安威遺跡	集落跡	弥生～古墳	〃 安威	須恵器
57	4-29	耳塚古墳	円墳	古墳後	〃 耳塚3丁目	横穴式石室、割注式・組合式石棺
58	4-30	鼻摺古墳	方墳	古墳後	〃 〃	一边33m・周濠〔別称耳塚方形墳〕
59	4-31	耳塚遺跡	集落跡	縄紋後・弥生	〃 〃 1・2丁目	壺棺墓・土器類
60	4-79	五日市遺跡	集落跡		〃 五日市	
61	4-75	中河原遺跡	集落跡	弥生～奈良	〃 中河原	弥生土器
62	4-35	郡遺跡	集落跡	弥生前～古墳	〃 郡3・4丁目	壺穴式土器・弥生土器類、石刀
				奈良・平安	〃 上郡1丁目	横立柱建物群・輪下郡衙指定地
					〃 上穂横2～4丁目	土師器、須恵器、埴谷古墳
					〃 五日市跡町	
63	4-43	穂横庚寺跡	寺院跡	奈良前	〃 上穂横3丁目	瓦葺順・軒瓦
64	4-47	借買遺跡		古墳・弥生	〃 春日5丁目	伝借買寺あり・弥生土器・須恵器
65	4-60	春日遺跡	集落跡	古墳・弥生	〃 上穂横1丁目、 上穂横東町、 中穂横1丁目、 春日2丁目	弥生土器・須恵器・土師器
66	4-63	郡山古墳	古墳	古墳後	〃 郡山2丁目	
67	4-90	馬塚	古墳	古墳	〃 郡5丁目	
68	4-34	茶臼塚(馬塚)古墳	円墳	古墳	〃 〃	径約15m
69	4-80	郡山遺跡	集落跡		〃 郡山	
70	4-36	郡神社古墳	円墳	古墳	〃 郡3丁目	埴輪列・横穴式石室
71	4-101	郡山城跡	城跡	室町	〃 郡山1丁目	陶磁器
72	4-37	郡兒童公園遺跡	散布地	弥生～古墳	〃 郡3丁目	壺穴式石室・壺棺、石鏡
73	4-38	郡山古墳群	円墳	古墳後	〃 郡1丁目	横穴式石室群3基・土師器・鉄刀
74	4-39	地蔵池南遺跡	散布地	弥生後	〃 上穂横	弥生土器・石鏡
75	4-41	茨木ゴルフ場内宮跡	宮跡	古墳後	〃 〃	須恵器窯、須恵器
76	4-77	上穂横山遺跡	散布地	弥生～古墳	〃 郡2丁目	土器・石鏡・スクレイパー
77	4-40	上穂横山古墳	円墳	古墳後	〃 西穂横町	円筒埴直葬・須恵器大甕・鉄斧
78	4-42	上穂横神社西古墳	円墳	古墳	〃 茨木市西穂横町	カマド塚・須恵器・馬具
79	4-44	見付山古墳	円墳	古墳後	〃 上穂横3丁目 見付山2丁目	横穴式石室・凝灰岩製組合式石棺・馬具
80	4-62	石造灯籠	石造物	鎌倉	〃 春日5丁目	重文・延慶2〔1309〕年
81	4-46	見付山遺跡	集落跡・祭祀跡	弥生～古墳	〃 西穂横町	壺棺?・弥生土器・鉄刀
82	4-45	弁天山遺跡	墓地	弥生後期	〃 西穂横町	壺棺
83	4-48	松沢池北遺跡	散布地	弥生～古墳	〃 北春日丘1丁目	弥生土器・須恵器
84	4-49	松沢池底古墳	古墳	古墳中	〃 南春日丘4丁目	武人埴輪
85	4-50	上寺山古墳	古墳	古墳後	〃 中穂横3丁目	カマド塚・組合式石棺・馬具
86	4-76	駅前遺跡	集落跡・古墳	弥生～古墳	〃 駅前	須恵器・土師器・埴谷古墳
87	4-56	上中桑遺跡	集落跡	弥生～古墳	〃 上中桑1丁目	壺穴式住居・横立柱建物

NO	路線コード	遺跡名	種類	時代	所在地	備考
88	4-06	茨木城跡	城跡	室町～江戸	片桐町	陶磁器
	4-104	茨木遺跡	集落跡 城下町跡	古墳 室町～江戸	上泉町、東宮町 片桐町、宮光町 本町、元町、 大手町	須恵器・ 陶磁器・瓦
89	4-82	牟礼遺跡	生産跡	縄文～弥生	中津町	流石・土曜・木田・縄紋晩期土器
90	4-32	総持寺遺跡	集落跡	弥生・奈良後～平	三島丘1丁目	彫穴住居・建物群・区画溝
			古墳群	安・古墳	三島町	埋没方墳群・木棺直葬?
91	4-32	総持寺	寺院	平安～現代		瓦葺・瓦葺類
92	4-27	太田庵寺跡	寺院跡	奈良前	東太田2丁目	塔心礎・軒瓦・瓦葺類・舍利容器
93	4-28	太田遺跡	集落跡	弥生～室町	太田東芝町	溝・弥生土器・陶磁器
94	4-26	茶臼山古墳	前方後円墳	古墳中	太田3丁目	全長225m・造り出し・埴輪・5基 の階家(宮内庁管理下)
95	4-25	石山古墳	前方後円墳	古墳中	花園2丁目	周濠・葦石・埴輪・鉄鉋
96	6-40	二子山古墳	前方後円墳	古墳	高槻市上土室6丁目	全長40m・造り出し
97	6-41	土保山古墳	円墳	古墳	土室343他	径約30m・木棺・武器類
98	6-43	香山古墳	前方後円墳	古墳	土室5丁目	全長90m
99	6-167	土室遺跡	集落跡	古墳～奈良	上土室5・6丁目	土師器・須恵器
100	6-138	上土室遺跡	古墓	古墳～鎌倉	上土室5丁目	須恵器・陶磁器
101	6-44	新池遺跡	集落跡・生産跡	奈良・古墳中～後	上土室1丁目	園史・埴輪工房群・埴輪窯群 掘立柱建物群
102	6-165	塚原遺跡	集落跡	先土器～弥生	塚原3丁目	旧石器・弥生土器
103	6-39	塚原古墳群	円墳・方墳	古墳後	塚原1・2・3丁目	110基の群集墳
					阿武野1丁目	
104	4-105	阿武山古墳			茨木市大字安成2336	横口式石塔・夾注指・玉注・地定藤
	6-38	円墳	古墳終末		高槻市奈佐原844	原鎌足墳墓
105	4-5	桑原古墳群	円墳群	古墳後	茨木市桑原	4基の群集墳
106	4-6	初田2号墳	円墳	古墳終末	山手台2丁目	横穴式石室・銅釘・漆木棺
107	4-7	初田1号墳	方墳	古墳終末	桑原	一辺約10m・埴輪式六式石室・漆喰
108	6-4	片ヶ谷古墳群	円墳群	古墳	高槻市奈佐原	47基の群集墳
109	6-3	阿武山1号墳	円墳	古墳		径約10m・横穴式石室?
110	6-5	靈仙寺	寺院	中世～現代	靈仙寺	瓦葺類

久庄遺跡は、9世紀後半から10世紀にかけてと、13世紀後半から末にかけての2時期の掘立柱建物群が明らかになっている。他には、郡・溝沖・東奈良遺跡において、平安期から中世中期にかけての掘立柱建物や井戸などが点的に検出されているが、集落構造が判明するまでには至っていない。また、山間部には、クルス山中中世墓地や伏原の中世墓地・忍頂寺や八幡神社の五輪塔・勝尾寺の五輪塔・勝示町石、佐保の石槽(岩風呂)などが点在しており、注目される。中世期を通じて、山間部には泉原城・佐保栗栖山砦城や善福寺原城などの山城、平地部には太田城や福井城が築造され、中世末から近世にかけて茨木城が築造されている。高槻城・芥川城、西の池田城・有岡城(伊丹城)などとともに北摂地域における要地に、中世以来、重要な支配の拠点として築城され、幾多の興亡が繰り返されながら、歴史上重要な城郭として存在し続けた。本格的な調査が未だ実施されておらず、現在では縄張りさえも全く判明しない幻の城となって、今後の調査の成果に依らなければならない。中世末期に培われたキリスト教が禁教となった近世期にも、北摂の山中は、「隠れキリシタンの地」として命脈を保っており、近代に入ってそれらの遺品が相次いで発見されている。そうした墓地を始めとする遺跡にも注目する必要がある。

【筑西市埋蔵文化財文献抄】

- 1) 昭和34 田代克巳 「筑西市半町縄文遺跡の遺物」『史学季刊』1
- 2) 昭和39 「筑西市史」本編1 筑西市役所
- 3) 昭和39 「静房寺跡跡石火石系縄文遺跡発掘報告」筑西市教委
- 4) 昭和39 藤井正三 「静房寺跡跡石火石系縄文遺跡の調査報告」『史跡と築城』347
- 5) 昭和39 川勝敏太郎 「静房寺の瓦輪母と可石」『史跡と築城』347
- 6) 昭和41 藤井一夫 「筑西市如意谷発見の銅鐸」『大府府教育委員会月報』18-4
- 7) 昭和41 藤井一夫 「筑西市如意谷における銅鐸の発見」『古墳の調査』2-2
- 8) 昭和46 「中尾塚古墳発掘調査報告書」筑西市教委
- 9) 昭和46 筑前和雄ほか 「加賀谷」『事典地区における埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大坂文化センター
- 10) 昭和46 島田義博 「加賀谷遺跡」『加賀谷遺跡』1-1(昭和46) 2-9(昭和46) 北畠中尾塚遺跡ともなう縄文遺跡 筑西市埋蔵文化財調査委員会
- 11) 昭和46 「加賀谷遺跡発掘調査報告書」加賀谷遺跡調査委員会、筑西市教委
- 12) 昭和46 筑前和雄ほか 「筑西市如意谷における埋蔵文化財の調査」『大坂文化誌』11
- 13) 昭和46 文化庁 「銅鐸大府府筑西市如意谷町出土(昭和46年6月調査)」『月刊文化財』53-11月
- 14) 昭和47 「加賀谷遺跡」加賀谷遺跡調査会
- 15) 昭和47 「山嶽の高直河原一筑西市如意谷町「しおんじ山」石環の性格一」『大坂文化誌』14
- 16) 昭和47 辻尾幸市 「大府府筑西市神代町の考古学調査」『加賀谷文化誌』6
- 17) 昭和47 「加賀谷遺跡発掘調査報告書」加賀谷遺跡調査委員会、筑西市教委
- 18) 昭和47 「昭和47年1月1日地点発掘発掘調査報告書」筑西市埋蔵文化財調査委員会、筑西市教委
- 19) 昭和47 辻尾幸一 「山嶽寺院における群像立」『古文化論叢』藤井一夫先生古墳記念論集
- 20) 昭和49 藤島正明 「大府府筑西市の旧石器」『旧石器考古学』36
- 21) 平成1 藤島正明 「大府府筑西市の旧石器2」『旧石器考古学』38
- 22) 平成1 藤島正明 「筑西市の考古学」『筑西市立第三中学校地歴部』(外編・宮ノ原・龍川)
- 23) 平成1 藤島正明 「大府府筑西市宮ノ原遺跡発掘の発掘状況報告」『旧石器考古学』39
- 24) 平成1 藤島正明・中山隆雄 「筑西市内川遺跡出土の「の」字状石製品」『月刊考古学ジャーナル』310
- 25) 平成2 藤島正明ほか 「筑西市の考古学3-パステル片石製品の研究-」筑西市立第三中学校地歴部(龍川、止々呂巻(龍山)、新橋(坂))
- 26) 平成2 藤島正明ほか 「西園、丹波河津」歴史の遺跡調査報告書 大府府教委
- 27) 平成2 藤島正明 「筑西市の石器9」『筑西市の教育』27(龍川)
- 28) 平成2 藤島正明 「筑西市の石器7」『筑西市の教育』28(龍川)
- 29) 平成4 大塚典夫 「筑西市の考古学5」筑西市立第三中学校地歴部(龍川、新橋)
- 30) 平成5 藤島正明ほか 「筑西市の考古学6」筑西市立第三中学校地歴部(龍川の内)
- 31) 平成5 藤島正明 「筑西市の石器9」『筑西市の教育』30
- 32) 平成6 上野正明ほか 「築山発掘発掘調査」現地調査報告資料30 (財)大府府埋蔵文化財協会
- 33) 藤島正明 「筑西市における旧石器文化の調査」『藤山史・龍山資料収集に関する研究』歴史

【茨木市関係埋蔵文化財文献抄】

- 1) 昭和38 藤原末治 「藤原三島郡耳原村の一古墳」『考古学雑誌』3-7
- 2) 昭和38 藤原末治 「阿武山遺跡」『歴史地理』7-12
- 3) 大正3 藤原末治 「藤原の古墳遺蹟」『考古学雑誌』4-8
- 4) 大正3 谷井清一 「藤原に於ける藤原藤原足利山遺蹟を否定し併せて其大和多次郡改葬所をも尋ねず」『考古学雑誌』4-8
- 5) 大正3 谷井清一 「藤原に於ける藤原藤原足利山遺蹟を否定し併せて其大和多次郡改葬所をも尋ねず(兼研究)」『考古学雑誌』4-9
- 6) 大正6 藤原末治 「藤原の野原遺蹟と藤原の北地家」『考古学雑誌』8-2
- 7) 大正10 藤原 正 「北園より発見したる切欠方遺物」『史跡』6-1
- 8) 昭和3 藤島正明 「藤原の石器7」『筑西市の教育』28(龍川)
- 9) 昭和9 藤原末治 「藤原に於ける乾埴塚の新発見」『考古学』5-5
- 10) 昭和9 藤原末治 「各地遺蹟 藤原阿武山に乾埴塚はる」『歴史地理』64-1
- 11) 昭和11 藤原末治 「藤原阿武山古墳調査報告」大府府史蹟史蹟天然記念物調査報告7 大府府
- 12) 昭和12 藤原末治 「藤原阿武山古墳調査報告」『近畿地方古墳の調査2』日本古文化研究所
- 13) 昭和12 藤原 正 「安土城遺蹟の調査」『古代学研究』5
- 14) 昭和20 志山 篤 「藤原阿武山古墳調査報告」『考古学雑誌』12
- 15) 昭和20 小林行雄ほか 「藤原阿武山古墳の調査」『史跡』35-5
- 16) 昭和31 小林行雄 「茨木市阿武山古墳調査報告」『日本考古学協会17回総会研究発表資料』
- 17) 昭和31 「阿武山古墳二層墓」『大府府教育委員会月報』8-4
- 18) 昭和31 藤島正明 「阿武山古墳」筑西市教委
- 19) 昭和34 田代克巳 「茨木市阿武山古墳の発掘調査」『考古学研究』21・22合併号
- 20) 昭和35 藤原末治 「阿武山古墳の調査報告」『阿武山古墳の調査』
- 21) 昭和37 藤原末治・小林行雄 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 22) 昭和37 藤原末治・小林行雄 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 23) 昭和37 藤原末治・小林行雄 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 24) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 25) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 26) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 27) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 28) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 29) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 30) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 31) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 32) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 33) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 34) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 35) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 36) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 37) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 38) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 39) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 40) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 41) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 42) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 43) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 44) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 45) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 46) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 47) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 48) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 49) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 50) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 51) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 52) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 53) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 54) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 55) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 56) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 57) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 58) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 59) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 60) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 61) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 62) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 63) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 64) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 65) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 66) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 67) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 68) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 69) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 70) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 71) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 72) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 73) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 74) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 75) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 76) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 77) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 78) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 79) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 80) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 81) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 82) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 83) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 84) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 85) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 86) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 87) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 88) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 89) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 90) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 91) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 92) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 93) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 94) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 95) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 96) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 97) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 98) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 99) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』
- 100) 昭和38 藤原末治 「阿武山古墳の調査」『阿武山古墳の調査』

- 53) 昭和49 「東京良運跡新発見の銅鐸・銅文の類型」『大府教育委員会月報』26-5
- 54) 昭和49 「東京良運跡より完全な銅鐸型を発見」『大府教育委員会月報』26-9
- 55) 昭和50 「東京良運跡」改訂版 沢木由教書
- 56) 昭和50 東京良運跡調査会「東京良運跡出土の銅鐸銅鏡」『月刊文化誌』30-6
- 57) 昭和50 白代文彦「東京良運跡出土の銅鐸銅鏡について」『考古学雑誌』41-1
- 58) 昭和51 「東京良運跡報告書」銅鐸銅鏡 東京良運跡調査会
- 59) 昭和51 白代文彦「東京良運跡銅鏡調査報告書一茨城県京成市、京成町所在地」大府教育委員会
- 60) 昭和51 藤 浩一「<研究上の視点より>としての銅文が読まれるのか一鳥取、香取中山」『古代学研報』81
- 61) 昭和51 藤村真一「東京良運跡」東京良運跡調査会
- 62) 昭和52 東京良運跡調査会「東京良運跡出土の銅文について」『考古学雑誌』43-5
- 63) 昭和53 奥井哲秀・白井忠雄ほか「茨城県古河郡北流郡調査報告一上野郡、畑田地区」『茨木市教書』
- 64) 昭和54 「東京良運跡調査報告」東京良運跡調査会
- 65) 昭和55 奥井哲秀「東京良運跡出土の銅鐸銅鏡」『考古学雑誌』66-1
- 66) 昭和55 井上喜久男「神体天笠外縁部接合部位置の調査」『豊後紀要』31
- 67) 昭和56 阿高神社遺跡調査会「阿高神社外縁部調査」『大府神社文化財情報』大府神社庁
- 68) 昭和56 奥井哲秀ほか「東京良運跡調査報告目録」東京良運跡調査会
- 69) 昭和56 「茨木の史跡」茨木市教書
- 70) 昭和57 奥井哲秀「茨木市史0号編、1号編の調査」『大府文化誌』15
- 71) 昭和58 「阿高古墳」『大府教育委員会月報』30-3
- 72) 昭和58 新橋本 「藤原時代の阿高」『考古学雑誌』119 (藤原)
- 73) 昭和58 山本二郎 「阿高古墳における藤原朝の考古学的考察について」『考古学論叢』関西大学考古学研究会開設40周年記念
- 74) 昭和58 藤田二郎 「銅鐸銅鏡年代について」『古代学研報』100 (東京)
- 75) 昭和58 渡辺 昇 「藤原朝の土器器形について」『考古学論叢』
- 76) 昭和58 末岡文孝 「藤原朝の土器器形一西沢、豊木遺跡を中心として」『考古学論叢』(東京)
- 77) 昭和58 三辻一博 「藤原時代の阿高」大府地下文化出土資料論の序」『市立土師の地産地消』考古学ライブラリー-14 (太田喜山・今城塚ほか)
- 78) 昭和59 田中作治 「藤原朝の阿高」『大府教育委員会月報』『古代学研報』104 (菅原ほか)
- 79) 昭和59 今尾忠彦 「阿高」『考古学雑誌』68-1
- 80) 昭和59 藤村真一 「阿高」『考古学雑誌』68-2
- 81) 昭和59 文化庁 「阿高」昭和57年度重要文化財の指定について 重要文化財調査東京事務所調査課出土品調査係編『考古学雑誌』70-2
- 82) 昭和60 中村 浩 「近畿の初期銅鐸群一各地の出土例の形成と発展の考察一その1」『古代学雑誌』15
- 83) 昭和60 藤村真一 「三輪銅鐸群の性格について」『古代学』38 (駒山)
- 84) 昭和60 木下正一 「三輪銅鐸の性格をめぐって」『日本文化』68(1) 藤村真一先生追悼記念(東京)
- 85) 昭和60 奥井哲秀 「阿高遺跡と東京良運跡」『考古学論叢』1 考古学を学ぶ
- 86) 昭和60 茨木市教育委員会「考古ニュース 縄文晩期遺跡から井草木跡跡発見」『考古学ジャーナル』256
- 87) 昭和61 富鍋 薫 「太田遺跡発掘調査報告書」茨木市教書
- 88) 昭和61 富鍋 薫 「昭和60年度 発掘調査報告書」茨木市教書 (富久江、春日、郡、東京)
- 89) 昭和61 富鍋 薫 「阿高遺跡発掘調査報告書」茨木市教書
- 90) 昭和61 奥井 尚 「紅葉石井谷が見られる型式石室」『古代学研報』111 (群馬)
- 91) 昭和61 石坂正志 「天皇陵」古墳のこと」『考古学ジャーナル』206 (太田喜山)
- 92) 昭和61 富鍋 薫 「縄文晩期の水田跡」『季刊考古学』15
- 93) 昭和61 広橋純二 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』16 (東京)
- 94) 昭和62 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 95) 昭和62 宇田重雄 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 96) 昭和62 奥井哲秀・井上喜久男 「昭和61年度 発掘調査報告書」1 茨木市教書 (東京) 中巻、小巻、厚巻
- 97) 昭和62 富鍋 薫 「昭和61年度 発掘調査報告書」1 茨木市教書 (東京) 中巻、小巻、厚巻
- 98) 昭和62 宇田重雄 「日本縄文文化の巻(上)一縄文器人の世界」『大府の古代文化』53 (東京)
- 99) 昭和62 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 100) 昭和62 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 101) 昭和62 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 102) 昭和62 奥井哲秀・井上喜久男 「昭和62年度 発掘調査報告書」1 茨木市教書 (太田、郡、石山、中巻、小巻、厚巻)
- 103) 昭和62 奥井哲秀・井上喜久男 「昭和62年度 発掘調査報告書」2 茨木市教書
- 104) 昭和63 富鍋 薫 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 105) 昭和63 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 106) 昭和63 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 107) 昭和63 奥井哲秀・井上喜久男 「昭和63年度 発掘調査報告書」1 茨木市教書
- 108) 昭和63 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 109) 昭和63 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』278 (東京)
- 110) 平成1 大野隆雄 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 111) 平成1 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 112) 平成1 上中重雄 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 113) 平成2 北島芳雄 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 114) 平成2 奥井哲秀・井上喜久男 「平成2年度 発掘調査報告書」茨木市教書 (東京) 中巻、小巻
- 115) 平成2 藤村真一・奥井哲秀 「東京良運跡発掘調査報告書」1 茨木市教書第2巻(藤原)に付随」大府教育委員会
- 116) 平成2 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 117) 平成3 富田久夫 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 118) 平成3 中村純二 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』27 (東京)
- 119) 平成3 「平成2年度 茨木市縄文文化財発掘調査報告書」茨木市教書
- 120) 平成4 渡野俊一・奥井哲秀ほか「平成3年度 発掘調査報告書」茨木市教書(中河原、東京、富久江)
- 121) 平成4 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 122) 平成4 富鍋 薫 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 123) 平成4 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 124) 平成4 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 125) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 126) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 127) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 128) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 129) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 130) 平成5 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 131) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 132) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 133) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 134) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 135) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 136) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 137) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 138) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 139) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 140) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 141) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 142) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 143) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 144) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 145) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 146) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 147) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 148) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 149) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)
- 150) 平成6 藤村真一 「阿高」『阿高の遺跡と阿高調査』『季刊考古学』134 (東京)

(紙数の関係で発行を略し、一部割愛したものがあ。1996.1現在)

第三章 調査の結果

第1節 層序と概要

調査地は、北摂山系から派生する前山開析谷部の裏川が、溪谷をへて北から南に流れ出た兩岸の斜面地にあたる。当地は尾根稜線部で箕面市と茨木市との境界になっており、丘尾部は箕面市に含まれるが、谷傾斜部は茨木市に複雑に入り組んでいる。こうした境界は、開発（開墾）の結果によるようである。山間部は、広葉樹の雑木林を残しているが、棚田としてよく開墾されていた谷周辺の山裾は、現在では、檜・杉の人工林となり、笹などの草木が生い茂った荒地となっている所も多い。今回調査を行った地点は、そういった所である。現標高ではT.P.+128.0~110.0mを測り、谷の方向南側に開けている。この川筋と尾根筋のどちらの道を通っても北東に約700mで粟生岩坂の集落に行き着く。

A区・B区とも元来、谷に向かう斜面を切り開いた谷水田であり、傾斜変換点の尾根部分の水田直下には、地山である黄褐色粘土或は基盤層である岩盤が層を成す。谷部に向かうにしたがって厚い水田盛土と旧地形の自然堆積土が見られる。層序は一様ではないが、概ね5層に大別される。尚、各層を0~4の層序に分類した後、アルファベットで各層を捉えた（PLAN. 2）。

- 0層：A区の一部で、水田放棄後の1層を覆う自然堆積層を0層として捉える。それらは山崩れの跡である。
- 1層：元水田層。耕作土（1a）と共に床土（1b）が観察される。雑段の下半部分には、人頭大の石で野面積まれた石垣を認めた。部分的にコンクリートブロックの補修や積み替えがあり、水田の下限を示すものである。1c層以下は、水田造成に伴う盛土で、総体的に土質は硬く締まっている。盛土は、山を切り崩した土砂を谷部分へ広げている。幾つかの工程（段階）がある様だが、水田の造り替えや旧水田層は全く認められない。
- 2層：旧自然地形（水田造成以前）の堆積土。調査区全体では、現裏川の旧流路（谷1）へ向かう落込み以外に2本の谷部（谷2・谷3）があり、流水がある関係で灰褐色~暗灰色の粘質土となっており、一部有機物が腐敗した堆積も認めた。遺物が皆無であったので、トレンチ掘りでこれらの落込み面と底部を確認することにどめた。谷部以外に、B区の谷状地形のくぼみ部（谷4）は水田造成時に削平されずに残った窪地に堆積した褐色土系の旧自然堆積である。風化して粒状になった「褐色の小礫」の混入を認めるが、遺物は皆無。
- 3層：地山層。北摂山地特有の片岩系の基盤層の岩脈が風化してできた4層の上に堆積した、大礫~礫混じり砂層、礫・粗砂~微砂の堆積層とそれらを交えた粘質土の堆積層である。共に北摂山地形成以前の侵食物の堆積土である。
- 4層：赤褐色の片岩系基盤層の岩脈層。斜面下半は、2層直下に4層が連なる。

土層観察には、セクションベルトに沿う様、No.1~No.4の断ち割りトレンチと、必要に応じてNo.5~No.9のサブトレンチを設定し、土層の把握と共に遺構・遺物にも注意をはらった。

結果は、水田の造成並びに旧地形を把握することが出来たが、建物など集落に伴う遺構は一切検出されなかった。A区は、完全に埋没していたが谷1がえぐれ込む地形で、B区は、現谷の方向に谷2が走

ている。また、両調査区は、現裏川谷に向かって急激な谷地形となっている。水田造成には、自然に埋設していた土砂の上に丘陵部を削った土砂で造成し水田を広げている。元々は、谷1を挟んで現地地形よりも急な斜面の尾根地形であったようだ。

第2節 検出遺構

今回検出した遺構は、近世炭焼窯跡5基と3層上面の溝1条、1c層で確認された水田に伴う暗渠と枕・ピットの類である。それに、1層を構成する近世～近現代の水田跡である。以下、一括して遺構の解説を加える。

A・B区-OZ (Fig. 7・PL. 2)

A区で11枚・B区で17枚の地形にそった横長の水田を把握した。これらの水田は、近年の谷水田そのものである。下方を石で補強し、畦堤を設けている。厚い所では、盛土は2m以上に達する。1b層ないし1c層上面では、水田経営に伴った素掘りの溝(唐鋤痕ではなく畝の溝)を認める。傾斜変換の上段水田では、礫を粉碎して詰めた暗渠を巡らしている。調査区外の元水田・谷・池も考慮に入れるとこの地区の水懸りが復原できる(IV章参照)。一部畦畔部分や1a・b層に近い盛土層で近世後期から近代の陶磁器細片を微量認めるのみで、遺物は皆無に等しい。調査区外の池堤は調査を実施していないが、これらの水田が最初に造成された時期は、近世期、新田開発時(18世紀中葉)以降と考えて間違いないであろう。いずれにしても、先人達がこの地の水田経営を繰り返し、米づくりに汗水を流してきた証である。

1-OK (PLAN. 3・PL. 7)

A区中央上段斜面、E18FTに位置。尾根部分の標高約118.0～116.8mに築かれた炭焼窯である。試掘時に確認された焼土の土坑がこれにあたる。検出面は1c層であるが、上部は廃絶時に破壊を受けており、窯の底部を確認したのにとどまる。斜面をL字状にカットして1層盛土と3層の地山を削り出している。ほぼ円形を呈しており、径約2.0m。立ち上がりの残存高約0.85m。底面は地山の3層に混じる礫が露出しているがその上に炭が2cm程均等に堆積していた。壁面・底面の石は焼けていたが層を成すと言うものではなかった。炭の上には焼土混じりの灰黄色土が充満し、部分的にブロック状焼土の堆積がみられた。上部の崩れた土と判断される。煙出しは確認されなかった。遺物は、何等出土しなかった。

2-OK (Fig. 4・PL. 6)

B区南、E18QEに位置する山斜面で検出した炭焼窯。破壊を受けた物が多い中では比較的よく残存していたので、全体が把握でき、構造・機能・性格的にも、他の窯も同様のものであったろうと判断された。窯は、水田経営時に水路で前面をカットされているが、水田地形に概ね合致する。位置する所は、風向きを考慮に入れた谷を挟んだ東斜面の傾斜変換線(最上段の水田と山裾の境)、標高で約120.4～118.9mに斜面をL字状にカットしている。窯上部側には山道の幹道が通る立地で、谷からの比高は約9～8m前後を測る。窯自身は、比較的小型のもので、長さ約2.6m、幅は胴部で約2.3m・底部で約2.0m、高さ約1.3mで、平面形は円形を成している。上部が欠失しており判断し難いが、天井はドーム状になっていたと考えられる。煙道は、窯奥壁面を縦に溝掘りし、前面に人頭大楕円形の石を9段積み上げササで塗り固めた構造になっている。垂直に約1.2m立ち上がり、上部出口は直径0.2m程の楕円形を成す。中央床面は平坦、焼成時の熱により床・壁共黒く硬質化し、約5cmの焼土層となっていた。底面

の焼土上には約4~2cm程の炭が堆積していた。埋土は、黄灰色の柔らかい土砂に天井部の焼土壁が落下しブロック状に入っていた。尚、出土遺物は、微細の炭化粒以外は検出されなかった。

3-OK (PLAN. 3・PL. 7)

B区の斜面、E18LB、2-OKから北へ約20m離れた標高124.0m前後に築造されている。幅約2.0m・高さ約0.8mの焼土の壁を検出したとどまる。奥行きは、約0.45~0.35mあり、ややドーム状になっていたので窯の横背面の残骸と判断される。掘方は見られず、斜面地山を掘削している。焼土は厚

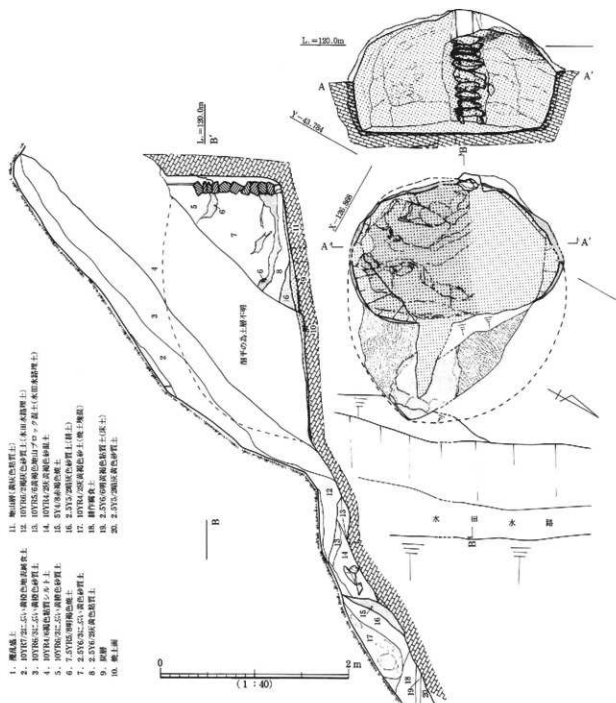


Fig. 4 2-OK平面・断面図

さ約10cmが認められ、一部スサが塗られているのが確認された。埋土は黄灰色の柔らかい土質であった。向かって右横に径約0.8mの三角・不定形なピットがあり、細かい焼土と炭粒が混じる窯と同一の埋土が充満していた。窯に伴うピットと思われる。窯共、出土遺物はなかった。

4-OK (PLAN. 3・PL. 7)

B区の斜面E18HB地点、標高125.0m前後の斜面を掘削して築造している。幅約2.7m・高さ約1.0m・奥行約0.3mを確認したにとどまる。壁面の焼けはあまりなく、炭粒混じりの淡灰黄色土が充満していた。さらに、残存小口部に不規則に並んだ径約10cm・深さ約25~12cmのピットが5個存在した。あまり熱を受けていない様だが、構造上、炭焼窯の奥壁部と判断された。遺物は出土しなかった。

5-OK (PLAN. 3)

B区の傾斜地、E13UBの標高124.0m前後で確認した。土層の断ち割りトレンチに引っかけ確認された関係上、全体を把握できなかった。斜面を一部横穴状にカットしていたと思われるが、地山の土質の関係で崩れており、幅2.0m前後・奥行約0.5mを確認したのみである。内部は一部空洞ながら崩れており、焼土壁と炭が折り重なって埋まっていた。出土遺物はなかった。

これらの窯は、切り合い関係から言えば、水田より古く位置づけられる結果にもなるが、埋土の状況・窯の位置関係や構造の復原から、水田経営時に同時存在していたと考えても差し支えないと判断した。時期については、炭化物の微細片の他に遺物は皆無で決めては欠くが、水田最終期(20世紀第3四半期)ではないにしても、水田造成以前の中世期にまで遡るなどと言うことは全くないと断言できる。一部谷側の2層の上層で炭・灰層面や焼土を確認できることや民俗学的事例からしても、水田・窯同時存在が裏付けられるし、考古学的見地からしても、近世期の炭焼き用小型ダルマ窯と判断できよう。

6-OS (PL. 8)

5-OKの西側の斜面、E12UX付近で検出した溝である。谷地形の山側に延びて行くが、検出長約11.0m・幅約3.5~2.0m・深さ約0.55mである。溝は、地山の黄褐色土を穿っているが、1層の水田暗渠に切られている。埋土は灰褐色粘質土で、若干炭が混じる。底面では灰色がかかる。遺物は何等検出されなかったが、埋土の状態から判断して、5-OKに關係する溝の可能性もある。

谷1 (PLAN. 2・3・PL. 4・5)

A区・B区の間を流れる、元来の裏川の落ちである。B区の段落ちは、元来の溪谷崖面のようである。水田造成にあたり、兩岸を埋め立てて、一部自然石による石垣で護岸している。谷は上幅で20.0~18.0m前後。尚、落込み面を確認したのみで、完掘は差し控えた。出土遺物は、上層から数片の19世紀の染付けと棧瓦の破片を見たのみであった。

谷2 (PLAN. 2・3・PL. 4)

谷1からA区に入り込む谷地形。水田造成時には、水懸り水路を横切らせる為か完全に埋めている。奥は調査区外に延びる。上幅で約18.0m程である。断ち割りトレンチ・畦が斜めに横切る形となってしまったが、水田造成以前の自然の堆積がよく把握された。谷1との激突面では、石材と礫が多く含まれており、裏川は谷2側に蛇行した流れを見せていたようだ。谷直上層で18世紀染付け極小破片を確認したが、谷からの出土遺物はなかった。

谷3 (PLAN. 2・3・PL. 4・5・8)

谷1から延びてくるB区の谷状地形。南の肩面を把握した。谷自身は標高約190mまで延びている。北の肩面は調査区の外側にあるのだが、概ね約23.0~15.0mと幅は狭い。検出面から底までの深さは概

ね2.5m前後。絶えず湧水がある。全面掘削はしなかったが、遺物は含まれていない。

谷4 (PLAN. 2・3・PL. 4・8)

B区の南より中央部を横切る浅い谷状地形を確認した。斜面上方は、水田造成で削られている。幅約30～22m・長さ約40m範囲にわたる谷状地形の浅い落込みの溜り部分である。埋土は褐色を基本とする。風化した橙色の礫粒がたくさんみられた程度で、遺物は出土しなかった。

《徳大寺跡》

[1995年9・10月踏査]

茨木市宿久庄7丁目の丘陵に、徳大寺跡と思われる平坦地や僧侶の墓塔が敷地・楡林内に残存しており、近世の寺域が確認される。

近世瓦が散乱する南北約100～60m・東西約100～50mの平坦面を認め、さらに東方3ヶ所のひな壇には、歴代僧侶の五輪塔・宝篋印塔・無縫塔(卵塔)などの墓石が並んでいる。墓石には、元禄・正徳・寶曆・文化・安政・文久などの年号を認める。

地元の伝承によると、明治の世に廃寺となった時、本尊の佛を西方の法恩寺にお移ししたという。法恩寺には、現在、木佛が安置されており、過去帳の写本は江戸初期の記述まで遡る。現在は尼寺となっているが、男僧の位牌も多数みられ、徳大寺との関連が指摘できるといふ。

黄檗第五代當寺開山賜紫高泉敦老和尚之塔／元禄八年乙亥十月十六日示寂
臨濟正傳三十六世天露津和尚之塔／正徳二壬辰年七月九日示寂

第3節 試掘調査の成果

1994（平成6）年度は、粟生間谷遺跡調査地点より北約1.5kmの山間部の開析谷部（今回の粟生岩版遺跡地点周辺）で試掘調査が行われた。各地点の土層の状況がある程度把握でき、また今回の調査成果を補完すると考えるので調査結果について抄録する。尚、今回の調査区内の概要については省略した。

調査は、対象地域の伐開が行われた後、開墾された耕作地跡の調査対象地約1,500㎡に、都合50箇所、51本のトレンチを開口し、表土から人力掘削で行われた。1994（平成6）年10月26日～1995（平成7）年1月9日で実施され、トレンチ総面積は、210㎡であった。

間谷地点の本調査地区に対しての北部地域のトレンチという事で、“NorthTre-nch”の意から「N T r.」と呼称して番号が付けられている。本書の地区名は今回便宜上のものである。〔田中〕

C地区（F i g. 5・P L A N. 1）

N 3 T r.（10m×1m）

厚さ20cm程の近現代の耕作土、床土の下層に三面の旧耕作面を確認した。その下は地山と思われる褐灰色の風化した礫層である。遺物は出土しなかった。

N 2 T r.（15m×1m）

近現代の耕作土、床土の下層は黄褐色シルトが10cm程堆積。その下は地山と思われる緑灰色の風化した礫層である。遺物は床土から近世陶器が出土した。

N 1 T r.（A：30m×1m、B：20m×1m）

近現代の耕作土、床土の下は砂礫層。砂礫層上部の15～20cmは礫径が5cmと小さく、灰色のシルトを含む地山の2次的な堆積かも知れない。地山は河川堆積の砂礫層である。遺物は耕作土と砂礫層上部から近世陶磁器、土師質土器が出土した。

N 4 T r.（5m×1m）

厚さ25cm程の近現代耕作土の下は20～40cm程の盛土で、その下は径10cm大の明黄褐色の礫層。地山は谷側へ急激に傾斜している。遺物は出土しなかった。

D地区（F i g. 5・P L A N. 1）

N 4 2 T r.（3m×1.5m）

厚さ15cm程の近現代の耕作土の下層にシルト混砂礫の盛土を約15cm程挟む。以下、150cm以上の山土の流れ込みか盛土と思われるやや粒の荒いシルト混砂礫が堆積する。遺物は出土しなかった。

N 4 1 T r.（5m×1.5m）

厚さ20cm程の近現代の耕作土・床土の下に、にぶい橙色シルトが数cm堆積。さらにその下層ににぶい黄褐色シルトが50cm強とにぶい黄褐色砂礫混シルトが以下55cm以上の厚みで堆積する。遺物は出土しなかった。

N 3 5 T r.（3m×2m）

厚さ15cm程の近現代の耕作土・床土の下にはシルト混砂礫が堆積している。地山は砂礫層で下部ほど礫が大きい。層は谷方向に傾斜している。遺物は出土しなかった。

E地区（F i g. 5・P L A N. 1）

N 4 7 T r.（2m×1m）

厚さ20cm弱の近現代の耕作土の下に10cm程の厚みをもつ盛土を挟み、山土の流れ込みと思われる灰色

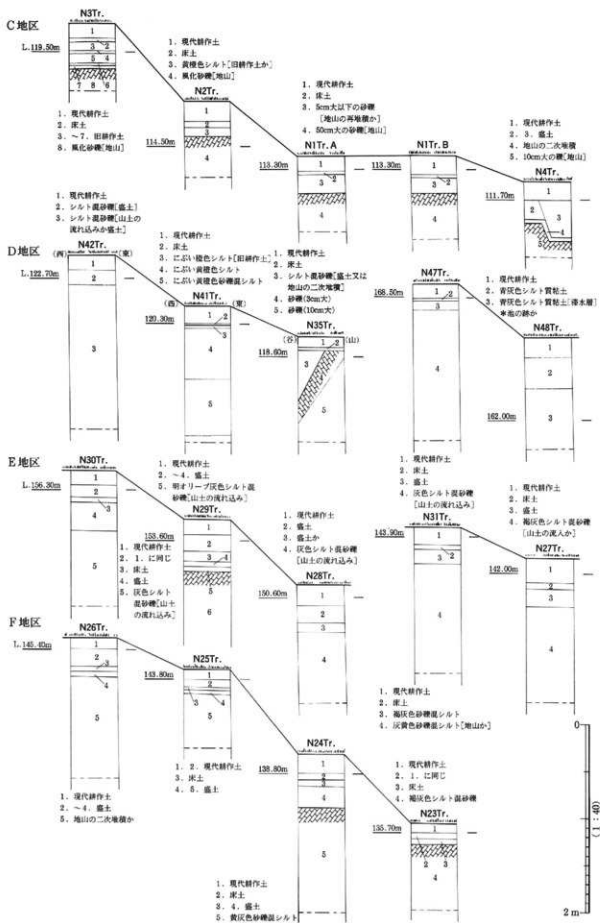


Fig. 5 試験地区土層柱状図

シルト混砂礫が135cm以上堆積する。遺物は出土しなかった。

N48 T r. (5m×1m)

厚さ20cm程の近現代の耕作土の下に青灰色シルトが30数cmの厚みで堆積。さらにその下層に青灰色シルト質粘土が65cm以上堆積する。湧水が現在も著しく、池などの貯水施設の跡かとも思われる。遺物は出土しなかった。

N30 T r. (5m×1m)

厚さ35cm程の2層の近現代の耕作土と床土の下に2層に分かれる盛土が35cm程堆積する。以下、山土の流れ込みと思われる灰色シルト混砂礫が80cm以上堆積する。遺物は出土しなかった。

N29 T r. (5m×1m)

厚さ15cm程の近現代の耕作土の下に4層に分かれる盛土が40cm程堆積し、山土の流れ込みと思われるオリブ灰色シルト混砂礫が90cm以上堆積する。遺物は出土しなかった。

N28 T r. (3m×1m)

厚さ20cm程の近現代の耕作土の下は、2層の盛土を30cm程挟んで、山土の流れ込みと思われる灰色シルト混砂礫が70cm以上堆積する。遺物は出土しなかった。

F地区 (Fig. 5・PLAN. 1)

N31 T r. (5m×1m)

厚さ25cm程の近現代の耕作土・床土の下層に盛土が15cm程堆積。以下、順に、褐灰色砂礫混シルトが約15cm、地山と思われる灰黄色砂礫混シルトが110cm以上堆積する。遺物は耕作土中に瓦片が出土したのみである。

N27 T r. (5m×1m)

厚さ35cm程の近現代の耕作土・床土の下に20cm弱の盛土を挟み、山土の流入と思われる褐灰色砂礫が100cm以上堆積する。遺物は出土しなかった。

N26 T r. (5m×1m)

厚さ10cm程の近現代の耕作土の下は4層に分かれる盛土が100cm以上の厚みで堆積する。以下、地山の2次のな堆積(山土の流れ込み)と思われるシルト混砂礫層が盛土の下に潜る。この層は、谷方向に向かい傾斜する。遺物は出土しなかった。

N25 T r. (5m×1m)

厚さ20cm程の2層に分かれる近現代の耕作土・床土の下に盛土が55cm以上の厚みで堆積する。遺物は出土しなかった。

N24 T r. (10m×1m)

厚さ25cm強の近現代の耕作土・床土の下は2層に分かれる盛土が30cm弱の厚みで堆積する。地山は黄灰色砂礫混シルトである。遺物は出土しなかった。

N23 T r. (7m×1m)

厚さ15cm程の近現代の耕作土は2層に分かれる。床土は5cm程。地山は褐灰色シルト混砂礫である。遺物は出土しなかった。

洞穴

採掘坑1 (Fig. 6⑦・PLAN. 1)

N42 T r. の上方、谷側(南)に開口する。岩盤をくり抜いている。間口部は幅80~105cm、高さ70

cmを測る。入口の下部は土砂で少し埋まっているが、坑道はやや下方に下がる。奥行約540cm・広い所で高さ148cm、幅88cm、奥壁部で幅30cm、高さ100cmを測る。ノミ状の工具で岩盤を掘削したものと思われる。

採掘坑2 (Fig. 6⑨・PLAN. 1)

N28Tr. の東方に位置。谷側(南)に開口している。洞穴はほぼ水平に、岩盤をくり抜く。開口部は幅124cm、高さ160cm、奥行き10.5mを測った。奥壁部で少し狭くなり、幅80cm、高さ65cmを測る。「#」状の傷が奥でみられ、碎石が坑道に多量に落ちている。奥に向かうほど碎石は大きなものとなる。天井部の入口付近の一部に銅の錆である緑青のようなものが若干付着しているのが観察された。入口の近辺にも碎石が散らばり、開口部の周辺の岩肌も段上に削り取られている。

小結

分布調査の結果を踏まえ試掘調査の運びとなったが、遺構・遺物の希薄な地域との予想に反し、遺構・遺物を検出する成果を得ることができ、特に、谷の低位部、谷川周辺の少し開けた地域から遺構、遺物の検出が顕著であった。

左岸(川の東側)ではN7Tr.・N11Tr. でピットが、N21Tr. では溝状の遺構が、N32Tr. では窯の遺構が検出されている。また、N12Tr. からも断面にピット状の落ちが検出されている。遺物包含層はN5Tr.・N7Tr.・N21Tr.・N10Tr.・N11Tr.・N12Tr.・N34Tr. に見られる。N5Tr. の灰白シルトから土師質皿が出土しているが、この包含層に近似した層はN6Tr.・N7Tr.・N21Tr. に存在する。N12Tr. からは下層の青灰色の還元層から土師質皿が出土しているが、この層に近似した層はN10Tr.・N11Tr. の下層にも見られる。N10Tr.・N11Tr.・N12Tr.・N33Tr.・N34Tr. の上層は、黄褐色や灰黄色・褐灰色などのシルト、砂礫混シルトであるが、若干の土師質・瓦質を含み、中世以降の盛土の可能性が考えられる。このN10Tr.・N11Tr.・N12Tr.・N33Tr.・N34Tr. はいずれも地山まで深く還元層を持つ部分もあり、本来、旧谷川の激突面にあたったと思われる。

右岸(川の西側)では、N44Tr.・N45Tr. からピットが、N38Tr. からは落込みが検出されている。また、比較的新しいと思われるが、N15Tr.・N16Tr.・N17Tr. からは杭跡が検出されている。N43Tr.・N49Tr. からも落込み?が検出されている。N16Tr.・N18Tr.・N19Tr. にある遺物包含層は灰白色シルトで、類似する層はN13Tr.・N14Tr.・N15Tr.・N17Tr.・N38Tr.・N39Tr.・N43Tr. 対岸のN5Tr. 等である。N8Tr. の下層の褐灰色砂礫混シルトからは瓦器・土師質土器片が若干出土している。N22Tr. より北のトレンチは遺構・遺物は検出できなかった。僅かにN31Tr. の耕作土から瓦片(新しいものか)が出土しただけである。

分布調査の際にも尾根筋で洞穴が1基検出されているが、N42Tr. の北上方とN28Tr. の東側で確認された。洞穴は何のために掘削されたかは定かでないが、硬い岩盤をくり抜いていること、当北摂から中国山地にかけての周辺は銅などの鉱物の産出地であることからそれらの採掘坑ではないかと思われる。〔岡本〕

<第三章第4節>

(註) I区・III区の概要は下記のパンフに、一部の遺物は速報展で紹介されている。(財)大阪府埋蔵文化財協会調査課二係「粟生間谷遺跡発掘調査」現地説明会資料39 1996. 1. 28、(財)大阪府文化財調査研究センター「発掘速報展大阪'96」大阪府立弥生文化博物館平成8年冬季企画展図録 1996. 1. 30

尚、調査の概略は近刊の上林史郎「大阪府箕面市粟生間谷遺跡出土の奈良三彩小壺について」『陶説』511 P33-39 (財)日本陶磁協会 1996. 10でもふれられている。

第4節 粟生間谷地区調査成果概要

粟生間谷地区の〔大埋協94-13〕調査成果について抄録する。過去の調査結果については、正報告書が刊行されるだろうが、概要の必要から、担当者の報告より転載して抄報としておく。

粟生間谷遺跡は、1993（平成5）年度の分布調査によって確認された、北摂山系より派生する丘陵の先端部の箕面市粟生間谷東から茨木市宿久庄にかけて広がる新規発見の遺跡である。〔田中〕

○調査概要

調査は、1994（平成6）年5月～1995（平成7）年3月まで実施した。まず、調査が必要であろうと思われる地域に、遺跡の範囲・掘削深度、および埋蔵される遺構・遺物のおおよその性格を見極めることを目的とした、68箇所の「テストピット」を設定することから開始し、次に、本調査区域を設定した。

調査地は、箕面市粟生間谷東に当たる地点で、北摂山系に源を発する勝尾寺川が丘陵の縁辺部を西から東へ流れ、形成する河岸段丘部から丘陵の先端部にかけてで、調査総面積が約8300m²であった。現況は、段々畑の耕作地で棚田を形成していた。調査区を南側の標高の低い耕作地からⅠ地区・Ⅱ地区・Ⅲ地区と設定した。さらに、茨木市宿久庄にかかる徳大寺地区において府道1号線幅幅に伴う調査を実施した。この二つの地域は、開析谷によって約270m隔っている地点である。徳大寺地区は、北から南へ流れる勝尾寺川の支流である川合裏川により開析・形成された谷部にあたる。これをⅣ地区として設定し、南からA区、B区、C区、C区拡張区、D区に細分した。以下に調査地区の概要を記す。

【粟生間谷Ⅰ地区】（Fig. 6①②）

本調査区は、扇状地にあたり、奈良時代・平安時代前期の遺構がほぼ同じ遺構面で検出されている。

奈良の遺構に地鎮土坑・土坑、平安の遺構に柱穴群・土坑・井戸・火葬墓などがある。遺構面は北から南へ傾斜しているが、柱穴は南西側に集中する。遺構面覆土はシルト混じりの黒褐色砂礫層で、包含する遺物から、平安後期（11～12世紀）の洪水層と考えられる。この層はⅠ地区の南側に分布する。調査区の北側では遺構が希薄で洪水層もみられないのは、後世の開墾により削平された為と思われる。北東部は茶褐色のシルトで覆われていた。これらの層の上には、中世の耕作層と思われる灰白色土層が堆積し、さらに上層の近世耕作土層・現代耕作土層へ層序を成す。

柱穴群：調査区南西部を中心に多数の柱穴が検出された。円形の掘方で径0.2～0.4mを測る。埋土中に黒色土器片や土師器片を含むものもある。

井戸1：調査区北東部で検出された素掘りの井戸。長径約2.2m・短径約1.9m・深さ約2.3mを測る。断面は逆台形を呈している。須恵器甕・黒色土器片が出土しており、平安前期（9世紀）と考えられる。

地鎮土坑1（Fig. 6②）：調査区南端部付近で検出された、直径約0.18m・深さ約0.09mの小規模な土坑。土坑の周辺は、平安後期ごろの洪水層によって激しく削平されていた。土坑の底面近くからほぼ正位の状態での奈良三彩の小壺が蓋で密封された状態で出土した。その出土状態から土坑の底近くに直接埋納された後、土砂で埋め戻されたものと思われる。開封した結果、壺底に53個以上のガラス玉が封入されていた。内容物について分析した結果、有機物が納められていたことと、玉の材質は鉛ガラスであるという見解を得ている。三彩の壺は8世紀前葉に編年できるものである。同様な三彩の小壺に玉類を入れて埋納した例は、平城京左京六条二坊十四坪（奈良市八条町）から発見されているが、それは小土坑内部に土師器皿を敷き、その上に三彩小壺2点を置いて、さらに甕を下向きにして蓋をしたものである。壺の内部には金箔とガラス玉数個が納められていたと報告されている。この土坑は宅地全体

の地鎮遺構と考えられているが、粟生間谷の場合も、土坑が位置する場所周辺には明確な建物遺構が無いので、土地全体の建物群に対して地鎮を行ったものと思われ、当時の人々の精神活動の一端を垣間みる事ができる。

土坑1：調査区北側中央部で検出された、直径約1.7m・短径約0.8m・深さ約0.3mを測る長円形の土坑である。埋土より須恵器長頸壺・杯蓋、土師器鍋・杯が出土している。奈良中頃（8世紀中葉）の遺物と思われ、遺構は墓墳の可能性はある。

火葬墓1：調査区中央部で検出された、長辺約1.2m・短辺約1.1m・深さ約0.2mを測る方形の土坑。灰・炭混じりの埋土から土師器片が数点出土した。骨片は検出されていないが、火葬墓と考えられる。

火葬墓2：調査区北側中央部で検出された、長辺約1.6m・短辺約1.2m・深さ約0.1mを測る方形の土坑である。埋土には灰や炭が混ざり、火葬墓と考えられる。

【粟生間谷II地区】（Fig. 6③）

I地区の北側に位置し、平坦な面を形成している。耕作土直下のマンガンを多く含むシルト層の下から10世紀から13世紀にかけての多数のピット等の遺構が、北西から南東にかけて検出された。ピットは、当該期の掘立柱建物の柱穴を構成すると思われるが、総てについて復原は行い得ていない。

掘立柱建物2：身舎は桁行3間×梁行2間で南側に2間分の軒が張り出す東西棟と考えられる。柱間は約2.4mを測り、主軸はやや西に振っており、地形にそっている。時期は明確ではないが平安中葉（10世紀）と考えられる。

掘立柱建物3：掘立柱建物2の東側で近接して検出された。身舎は桁行4間×梁行2間の東西棟である。柱間は約2.3mを測る。掘立柱建物2と主軸方向が同一である等、同時期と考えられる。

掘立柱建物4：掘立柱建物3の南側に位置。2間×2間の倉庫と考えられる。西と北にL字形の区画溝がめぐっている。鎌倉中葉（13世紀）の建物と考えている。

掘立柱建物5：掘立柱建物4の南側に位置する、2間×3間の倉庫と考える建物。掘立柱建物4と同様、北と西に区画溝2が巡っている。鎌倉時代中葉の時期と考えられる。

自然流路2：北西から南東にのびる流路であり、検出長約25m・幅約4.5m・深さ0.2～0.6mを測る。埋土からは黒色土器や土師器・瓦器等が出土している。地形にそった自然のものであり、鎌倉中葉（13世紀）頃に埋まっている。平安中葉（10世紀）頃に流れていたものであろうか。

【粟生間谷III地区】（Fig. 6④）

II地区の東部の河岸段丘面に位置している平坦地である。遺構は、耕作土直下のマンガンを多く含むシルト層を除去して検出された。奈良・平安時代、鎌倉時代前期、近代の遺構・遺物と共に縄紋土器が検出されている。

柱穴群：調査区南半部では多数の柱穴が密集して検出された。柱穴は、径は0.2～0.4m程の小規模な円形で、かなり切り合いがあった。埋土や柱穴径の違いから何棟か復原できそうである。黒色土器・瓦器・土師器の破片が出土することから、10～13世紀の掘立柱建物群と思われる。

掘立柱建物1：調査区中央南寄りに検出された。身舎は桁行5間×梁行2間で南側5間分に軒が付き、さらに外側の東・西・南の三面に庇がつく大型の東西棟の建物である。身舎の柱掘方は一辺0.6～0.7mの方形で、深さは0.3～0.4mを測る。庇部分の柱掘方は径0.4～0.5mの楕円形である。柱間は2.1～2.2m（約7尺）である。建物の総面積は約120㎡を測る。建物の柱間は統一された尺の使用や、真北を意識していることからかなり企画性に富むと考えられる、奈良（8世紀）の建物である。



Fig. 6 国文・粟生遺跡群1994年度調査写真

土坑 2 : 調査地南西部で検出された、長辺約 1 m・短辺約 0.5 m・深さ約 0.15 m の長方形の土坑である。土坑内東寄りには南北に並べられた土師器皿の列がみられた。土坑内の西側に遺骸を納めた土壌墓の可能性が。土師器から平安中葉 (10 世紀) 頃と考えられる。

土坑 3 : 調査区中央部で検出された、長径約 1.5 m・短径約 1.2 m・深さ約 0.3 m の隅丸方形を呈する土坑。埋土からは完形の瓦器碗や土師器大鍋が河原石と共に出土している。平安後期 (11~12 世紀) と考えられる。

地鎮土坑 2 : 調査区南端部で検出された。長径約 0.35 m・短径約 0.25 m の小規模な土坑に、20 数枚の土師器皿が 3~4 重に敷き詰められていた。建物に伴う地鎮祭の跡と思われる。鎌倉 (13 世紀) 頃の土師器皿と判断された。

溝 1 : 調査区北西部で検出された。溝の規模は長さ約 10 m・最大幅約 2.3 m・深さ約 0.4 m を測り、西から東へ自然流路に向かって延びていた。溝の中央付近には、ほぼ完形の黒色土器を 7 個体以上置いていた。水に対する祭祀であろうか。土器は平安前期 (10 世紀前半) 頃と思われる。

池 : 調査区北半部で検出された自然流路の下流側をせき止めて構築した大規模なものである。さらに調査区外の東へ広がっていくものと思われる。池の規模は、東西 30 m 以上・南北 23 m 以上、最深部は池の肩から約 1.8 m を測る。池の下層から黒色土器片が、中・上層から瓦器片が出土することから、10 世紀から 13 世紀中葉にかけ機能し、その後耕作地と化していったと思われる。

自然流路 1 : 調査地北東部で検出された。北西から東に蛇行しながら流れていた。検出された長さは約 30 m、幅約 1.2 m・深さ 0.3 m を測る。埋土は灰色砂礫土で地山の青灰色粘土層をえぐっている。縄文時代後期前半期の粗製の深鉢が出土している。

【徳大寺 IV 地区】 (Fig. 6⑤⑥)

川合裏川によって開削された谷部で、I・II・III 地区から約 250 m 離れている。各調査区も離れているため、南から A 区・B 区・C 区・D 区と呼称した。B 区から中世の柱穴・近世以降の暗渠、C 区から弥生時代ピット・古代の柱穴群・近世以降の暗渠が検出されている。

A 区 : 幅 0.5 m・長さ 12.4 m のトレンチを現府道 1 号 (府道茨木摂津) 線に沿って設定。上層の盛土を 0.5 m ほど掘削したら、道路を補強する投棄礫層に当たったので掘削を中止した。遺構・遺物は検出されていない。

B 区 (Fig. 6⑥) : 幅約 2 m・長さ約 22 m の長方形のトレンチを設定。瓦器・土師器を包含する層を除去するとピットが数基検出された。他に、近世と思われる礫を敷き詰めた暗渠が 2 条検出されている。

C 区 (Fig. 6⑤) : 幅約 5~6 m・長さ約 93 m の細長いトレンチである。北側は先細りとなった。調査区の中央部にピット群が検出された。ピットを覆う層は I 地区南西部に分布する黒褐色の砂礫層と近似し、黒色土器も出土しており、これに対応する層および遺構であると思われる。同じ遺構面から弥生後期の土器を出土したピットを検出している。他に、近世以降と思われる礫を投棄した暗渠が数条検出されている。その内の 1 条からは、底面に直径 2~5 cm・長さ 1~3 m の部材を敷いたものがある。

それらの他、遺構ではないが、噴砂跡 (地震痕跡) が検出されている。

C 区拡張区 : 幅約 2 m・長さ 11 m の長方形のトレンチである。盛土を 1 m ほど除去すると旧の耕作面が現れた。南側はアスファルトによる改良が加えられていた。土師器が数片出土し、近世以降と思われる土坑 (暗渠?) が確認された。

D 区 : 幅 0.9~1.4 m・長さ 6 m のトレンチである。表土を除去すると、山土・礫の流れ込んだ層であった。機械で一部 2 m 近く掘削したが状況は変化しなかった。遺構・遺物は検出されていない。〔上林・岡本〕

第Ⅳ章 結 章

今回の調査では、予想されていた「谷の低位部、谷川周辺の少し開けた地域からの遺構・遺物の検出」は、谷部に堆積した水田客土中に含まれる陶磁器の微細片（水田経営時における2次的遺物）である事が判明し、若干の落込みやピット・杭跡は水田経営時の行為によるものと確認した。よって、中世・近世期に至る集落跡を検出することはなかった。また、川合裏川周辺の開発は、少なくともこの地点では、古代末（平安）や中世前期（鎌倉）に迄遡る事はなく、近世以降と判断される。そして、水田を最初に造成した時期は、近世後期以降と考えられる。いずれにしても、先人達がこの地の水田造成を行い、米づくりに汗水を流してきた証である事は既に述べた通りである。

【水田の水懸り】（Fig. 7）

確認した水田は、大がかりな伐採の結果、現地表で観察された水田そのものであった。1948年撮影の航空写真では、はっきりと捉えられている。周辺地は、戦後の櫛の植林で水田が人工林と変化する中、調査地では阪急グループが実施した1972年の測量時や古い1/2500地形図でも水田経営が行われていた事が見て取れる。しかし、新版作成の1987年段階では既に荒地が図示されている。水田が放棄されたのは、まさに高度経済成長期と合致する。

7図を作成して水懸りを示した。A区・B区を挟んで川合裏川の本流の一つが標高450m付近あたりから溪谷を流れ下っている（太い矢印）。真夏でも水は枯れることはなかった。それを利用しているのが東のA地区の水田で、取水①より水路で山裾に導き、上から落として来ると考えられる。しかし、同じ左岸のC地区には、尾根筋にあたる為回すことは出来ず、谷に溜池を設けここより取水（④）、そして下の水田に送っていたようだ。この谷は水に乏しく、溜池の堤の高さも大掛りなものであった。B地区は、川合裏川の谷の恩恵を全く受けず、溜池より取水③の上段の水田より横に送って下に落としていくのが基本だろう。D地区の少しの水田はB地区の溜池より落ちる水を山裾に設けた水路から直接取り入れる。B地区でももちろん水路際には直接入る箇所もあろう。E・F地区はそれぞれ小規模な溜池を設け（取水②）、それを落としていくと言うやり方である。旧谷筋だけにしみ出てくる湧水はある。地区外の南西谷は上流に比較的大きな溜池があり、流れのある谷筋であった。取水⑤より直接取って植林化した南の水田群を灌漑したのであろう。何れにしても、ポンプのない時代、水が低い処から高い処へ逆に流れることは有り得ないのであって、水量のある川の恩恵を受けない地区は溜池の構築により初めて水田経営が可能となったと思われる。

【炭焼窯】

試掘調査で確認された焼土坑は炭焼窯（1-OK）と判明し、新たに4基の窯（2-5-OK）を確認した。同様の窯と思われる焼土の立ち上がりは、調査区外の土砂工事現場の断面観察時、同一谷筋の傾斜変換地点2箇所（C・D地区-OK）でも確認している。数基の窯が4箇所の地点に50~20mの間隔をおいて構築されていた事になる。さらに、この谷筋では他にも標高125~120m前後の傾斜変換地点に炭焼窯が並んでいたと考えられ、風の関係等を配慮して地形を考慮に入れた配置と構造など興味深い。近世から近現代のものとは言え、調査例が殆ど知られておらず、民俗学的事例からのアプローチも必要であろう。

伝統的文化は、近年の社会の変貌に伴う生活文化の激変で完全に歴史の間の中に没してしまっが、

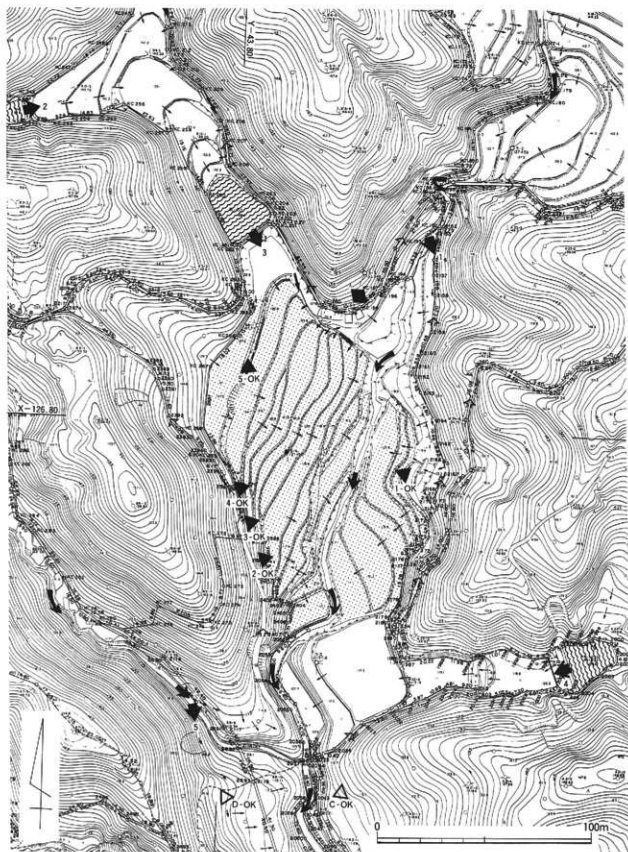


Fig. 7 現況水田地割りと窯・水利との関係図 (1972年測量箕面・茨木立会山現況図より作成)
 網目は発掘調査対象範囲・三角印は炭焼窯の位置・波線は涵池。太矢印は水の流れを示す。取水部は①～⑤。細矢印は取水を表すが、概念図であり、実際の水口の位置ではない。白ヌキ矢印は旧主要道。

一部伝承されていたり、筆者が確認した大和山中の1950年代までの炭焼窯のように、一部レンガやコンクリートであるものの、全く同様の規模と構造のものがあつた。発掘調査例としては、東京多摩丘陵の調査例（86遺跡197基以上）と分析が参考になる^(註1)。

それによると、大きくは、「築窯製炭遺構」と「坑内製炭遺構」（「伏焼法」とも呼ばれる）との二つに分けられるという。検出した窯は、前者に属するもので、地表面から半地下式に掘りくぼめ、床を平坦にし、壁体や天井を築く。分類に見る円形系に属する。後者は、簡易な手法で古代から普及していた事が各地の発掘調査で確認されてきているという。「築窯製炭遺構」は、白炭（素火で消化し多部が灰でおおわれ白色を呈しているもの）を得る石窯と黒炭（精煉後窯内を密閉しそのまま消化冷却したもの）を得る土窯とのちがいがあり、後者は、十分に炭化させてから木炭を得る窯内消化法をとるという。窯構造は焚口部前庭・焚口部・炭化室・煙道（排煙口）から成っているが、今回検出した窯の類は、自家製或は村単位の需要量の程度であろうか。

ちなみに、広範囲な需要をもつ和歌山県東牟婁郡本宮町あたりの紀南地方の山間部で細々と続けられている「紀州備長炭」の現代窯は大がかりなもので、瓦を焼くダルマ窯規模である。元禄年間、紀州田辺の備後屋長右衛門（一説には備中屋長左衛門）がウバメガシを原料に始めたと言う。煙が出にくく、火持ちが良い程上等とされる（材質が剛密な上に焼き上がり硬度が高い）。

今後、現栗生岩阪集落、勝尾寺と周辺集落との関係で生産地を捉えることや、洞窟を残した畠山経営者のあり様など解明していかねばならない事も課題として挙げられよう。

【街道と問谷集落】（Fig. 3）

栗生の地は、古代から中世にかけては、摂津国嶋下郡宿久郷（シマシモノコオリスクゴウ）に当たる。近世西国街道は、茨木市の椿本陣から豊川を通り小野原の丘陵を横切つて栗生新家から今宮へと通っている。一般的にこのルートが古代まで遡る「山陽道」とさほど変わらないと考えられている。栗生問谷集落の関係で、想像を逞しくすると、古代の山陽道は宿久庄の山裾から北西方向に折れ、勝尾寺川に沿つて山沿いに栗生の問谷を通り抜け、外院に至っていた古道（茨木箕面丘陵線のルート）を想定するとどうであろうか。そうすると、集落は街道に面し、建物主軸方位も意識していたことになる。さらに、亀岡街道方面へ抜ける分岐路にもあたり、この古代から中世にかけての集落立地は、興味深いものがある。

式内社新屋坐天照御魂神社の存在や名刹勝尾寺にも近く、『勝尾寺文書』の中には、栗生村は元来国衙領であるという記事も見受けられる。そうしたことから、問谷古代集落は、集落・建物規模だけでなく、都からもたらされたと思われる三彩小壺の有りようなど、一般の農村集落などと言うことは有り得ない。公的な施設を伴つた集落の可能性が浮かび上がり「郷衙」「駅家」などとも関連するのかもしれない。今後の調査が大いに期待される処である。

(19960331稿)

(註1) 村田文夫(1991)「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究—多摩丘陵における近世及近・現代の発掘事例から—」『物質文化』55 P22-74、村田文夫(1994)「発掘調査された炭焼窯—多摩丘陵における近世及び近・現代の事例から—」『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会第7回大会発表要旨 P110-123

炭焼窯の各調査でもその明確な時期決定は、考古学的方法からでは非常に難しいことと、渾然と中世に遡る可能性の「築窯製炭遺構」もあるが、多くは近世・近現代で、新しいが故、研究の基礎蓄積の困難さが説かれている。尚、多摩の場合、ある一定の範囲（半径5km）に集中が限定できるという。

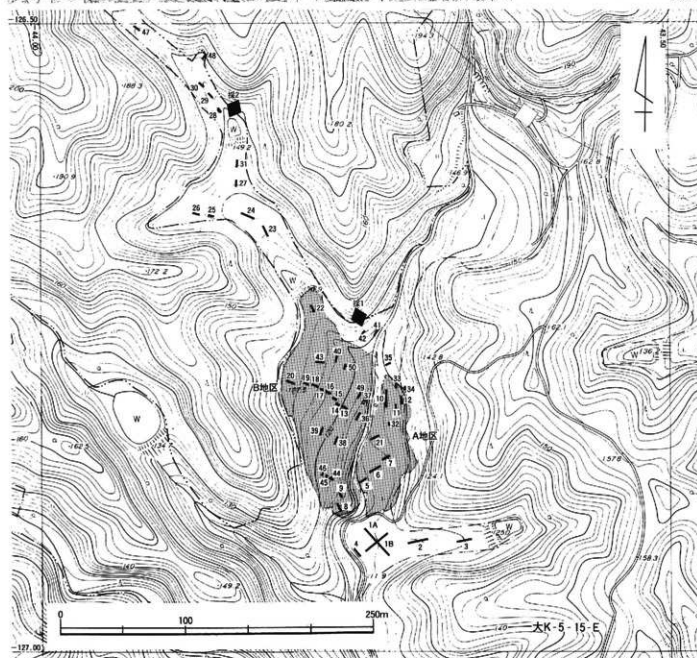
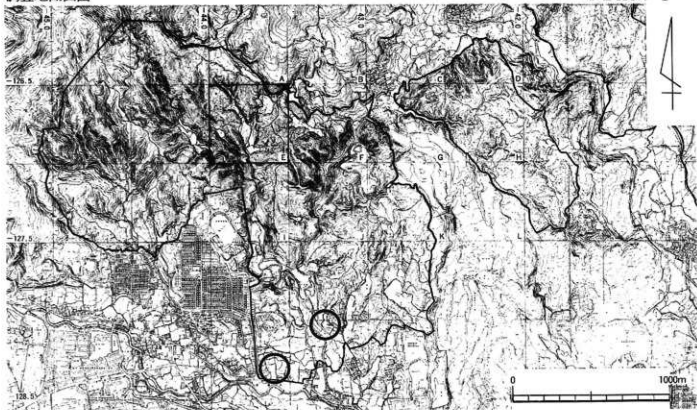
栗生は、鎌倉時代、炭が国衙の重要な官物納品となつていたと言われており、当初、今回検出された窯の遺構はこれらと関係するのであろうかと言う問題意識も抱いたが、そう言う積極的な証拠は、何一つ得られなかった。

(註2) 樋口清之(1993)『木炭』法政大学出版局 が炭について参考になる。又、和歌山県の現代窯について、民俗学的事例を紹介したものが管見にのぼる。河内一浩(1993)「紀州の炭づくり」『摂河泉文化資料』42・43合併号 P108-119、窯出し・ロだき・焼火・精煉と主な工程があり、窯内300℃前後で炭化した木炭に空気が送り込まれ、赤熱(1050℃)し、その後、土と灰とを混ぜた消粉をかけ消火冷却するという。まさに経験とカンの手作業である。

図面・図版

凡例

1. 遺構には一連番号を付し、その後にはOK：竈、OZ：水田、OL：池、OS：溝・濠、OP：ピット、OO：土坑、SX：その他、などの分類記号を標記する。
2. 遺構の寸法数字はm単位である。
3. 実測図の基準線は国土調査法の第Ⅺ座標系によるものである。ただし、図面ではX、Yおよび単位mを省略している。



(四角は今回の地点・丸印は粟生間谷協94-13調査地点、1987年測量 1:2500地域計画地形図より作成)

